

雜錄

李戶豐田亮先生自筆

126
108
1

卷之九

人冬大衣習
口在大衣
印

吹厄發不言

人令大衣習吹龍發本声
司書記天功之號也

卷之六

吠但近幸不吠矣。凡令来隼人令大衣習吠

吠龙發本声

右發末声物心大声十遍小声一遍訖一人更發細声二遍

凡威儀所須橫刀一百九十四口，鞘一百八十四枝，以赤
云

白土墨
畫徇形木槍一百八十竿胡床一百八十脚云々なぞ隼

人乃重渺不委以見也。一之曰：「是也。」集人左大隅薩摩國

人間の道上に云はれ如
て朝廷に召され仕奉ひうが永く留まつて京近支

國の人物を以て子孫あり不隼人也稱て其職小
奉れ定めり隼人式小五歳内及近江丹波紀伊等

國集人望何足是乎又諸國集人望何足是乎

大隅國の隼人乃留住。中原鹿富記。

隼人司領山城住國大佐詔内隼人司領名又康正元年十月十七
日是日當國大佐詔中覲充又主南未知實名來申

予對面申云大位內集人領大嘗會由卜申于田地一時二反有大嘗會時參浴於官廳奏風俗舞人役是也

見えゝうりさて大衣アマ云クモち右の近き國シテは隼人の中
小て二人を擇セレびシテ補スルくよりのうり隼人式アヒタ大衣
者擇譜第内置左右各一人大隅アハラ為左阿多アヒタ為右教道隼人
人云クモこや見ゆ大隅阿多アヒタ其國シテの人を云クモハ非文
先祖の出アリ地を以て近國アヒタ形シテ城シテ也も大隅隼人阿多アヒタ並
隼人アヒタ別シテ云クモ是或人アヒタ大衣アマを色大隅阿多アヒタ並
ばて一種の隼人乃如く云クモ係シテ式アヒタ考アヒタ妄說
形シテ續後紀アヒタ小山城國人アヒタ右大衣阿多アヒタ隼人逆足アヒタ云人
見逃アヒタ又番上隼人アヒタ乃云クモハ本國アヒタ又加アヒタ是或人アヒタ上
て仕奉アヒタ者アヒタ職アヒタ負アヒタ令義解アヒタ小分番上下一年為限アヒタ
て是或人アヒタ續紀アヒタ廿五小大隅薩摩等隼人アヒタ相替アヒタ云クモこ
而アヒタ是或人アヒタ續紀アヒタ廿年停太宰府進隼人アヒタ而アヒタ番上隼
及近江丹波紀アヒタ伊等國隼人幹了者申省補之アヒタ而アヒタ類
見アヒタ隼人式アヒタ小亢番上隼人二十人有闕者取五畿内
者アヒタ新小上是永く留アヒタ京畿アヒタ小住居アヒタる
人アヒタのあアヒタハ非アヒタ又今來隼人給時服及塙アヒタ云クモ今來隼人身亡者
で本國アヒタ上是永く留アヒタ京畿アヒタ小住居アヒタる
者アヒタ此を妻子アヒタ代アヒタも率て上アヒタ故アヒタ女アヒタも而アヒタ式に見
擇取畿内隼人充之二十人為限アヒタ云クモ今來隼人身亡者
也バ此も中昔にち入數定アヒタ有て召上せらばアヒタ也

掃守

守 古語拾遺云彦漱尊誕育之日海濱立室于時掃部
連遠祖天忍人命供奉陪侍作幕掃蟹仍掌鋪設遂以為
職号曰蟹守今俗謂之掃守者彼詞之轉也や何り和名
抄小掃部寮加牟毛理乃豆加佐少何り加牟毛理ア
官名を信小蟹守有ト云シ和泉國和泉郡の郷名乃掃

守ハ加尔先利也あもうて姓氏錄小掃守連振魂命四
世孫天忍人命之後也雄畧天皇御代監掃除事賜姓掃
守連也あもうて異なり傳なりりて此御產殿のこゆ今
日向国那珂郡宮浦村の海辺ふ其御跡云て大なる
鶴戸權現也云此を以うべ阿ムサ

玉依姬 玉依ア同名う書紀一書ハ榜幡千姫云萬幡姬見玉依姫
命世記水埴宮段ハ活玉依鬼賣阿モ賀茂御祖神の御名も玉依姫有
山城風土皆右近翁乃称名す玉神名帳ハ信濃國埴科郡玉依比賣神
記ルル社アツミ是を何モ乎祠也ハ小の阿ムサ

日千穗タニ見命者坐高千穗宮

高

千穗宮ハ白檣原宮段の初も坐高千穗宮而云之を
阿モば彼御世より御世より此宮ハ坐坐し歎り抑述
迄藝命天降坐て初て笠沙之御崎小宮敷坐モシ御
上傳十五ハ十七葉小見也も如く所モば此高千穗宮也申
以も即彼笠沙御崎より宮称ラ傍く思はそバ又よ
く思ゆ小高千穗也云名又御陵も其高千穗山は西小
在也阿モバ此宮ハ彼笠沙御崎よりモ別小高千穗笠
御崎ハ必薩摩國うる皆きも上小云ほグ如し然き
バ其地をもうハ高千穗宮也云侍ク文彼山よ
モヤ、遠キ大隅國ハ高千穗山ハ近き地也トヒテ聞

トハ到坐し於る傍ノか、もバ神代の高千穂シマツカミヤ云々し
山也此ニ處於りタリも安此也彼も同名なりトシテか古
より混モリて一の山れども語傳シテア來了此記シテも書紀
の自然記シナニキされあり於リ傍ノちて然ニ處共小同名安
高も負タリ也所シテ以テ書紀小襲之高千穂峯シマツカミマツカミ也もの
是す所シテ也形シテ傍ノし

弘農ヒラマツハ大隅國オシマノクをシテバ是霧嶋山シマツカミマツカミ安也高千穂丸シマツカミマツカミマツカミ也シテ證
於リりかシテれば初迹シモツシテニ藝命エイメイハ笠沙御崎シマツカミマツカミをシテ宮に坐ス
レ代德シテニ手見命シマツカミマツカミ小至シテア此宮シマツカミマツカミ小遷坐シテシテそハ仰アガマ

御陵者

○在其高千穗山之西也書紀から後久之彦火ニ出見尊崩葬日向高屋山上陵也而口決小高屋前為竹屋也前小見也竹屋を以竹刀截其兒臍其所棄竹刀終成竹林故号彼處曰竹屋也ありしをハシヒモ延喜諸陵式小日向高屋山上陵彦火ニ出見尊在日向國無陵戸松下氏前皇廟陵記小薩摩國阿多郡大隅國肝屬郡俱有鷹屋郷蓋二郷境相接恐此地之山也云此說信小謂も但し阿多郡也肝屬郡也相接きての鷹屋の二郡かほくもるの又を鷹屋ニあるの其地理を知らざればぬる細形こをえしじじにまつすめ不國人くに人じんとい尋ねたず和名抄小大隅國肝屬郡鷹屋薩摩國阿多郡鷹屋也見

ゆ此高千穗山々上も云流如く霧島山なき島山なり侍さむば其西を大隅國おき薩摩國人さつまの云高屋山陵ハ大隅國肝屬郡内浦郷うちうら地方村ぢ方高屋山の巔みねハアリ此山上を今俗小國見山也云て國中を見已よりシテ也シテ海形かい麗うつく小高屋神社あり出見尊しゆを祭まつる也云是此說然はるハ然ハし彼地霧島山きりしま山やま然ハ多哉日向堂西方に方がた也シテ也シテ也シテ尋たずねなむ

物景也上も云源如く上代うだいハ大隅薩摩までかまて日向國也云シ御也アリ珍色めずら心こころなり神武紀小日向國可愛山陵の可愛もみか薩摩の地名みちのあるあ以ても知し得べし然しかるに今日向國宮崎郡佐土原の所アリ近ちか海うみ字シテ小高屋鳴アリ云ハ居ハ此御陵アリ也シテ心得ごんじ文書紀景行卷十二年不到日向國起行宮以居之是謂高屋宮云シテ居於高屋宮已六年也アリ云ハ心得ごんじ此御陵アリ也シテ此御陵アリ也シテ此御陵アリ也シテ高屋也ハ別ハ○書紀アリハ述シテ藝命尊不令命の御陵アリ

ヒ記されテ三御世の備キリ此記も必然有ルキニ也
乃ち小も大穂ニ手見命ハミ御歴年をも御陵を邑記
而テ餘の二御世のと共小見也。ハ初ナリ漏乃る
前ノ代シ故今致イで小此ハ其ニ御陵^{フタツ}をモ举テ注^ス
ギ。書紀云久之天津彦ニ火瓊^{ヒノカミ}ノ神尊崩因葬筑紫日
向可愛^{ヒコエ}之山陵^{云矣}。諸陵式小日向^{ヒコエ}山陵天津彦ニ
火瓊^{ヒノカミ}ノ神尊在日向國無陵戸ヤ阿尾廟陵記小今薩摩
國頬娃郡ヤ云々然る所シ和名抄小薩摩國頬娃^{江乃郡}
頬娃^ニ郡^ニ也。小^ニ也。字ハ紀伊の伊字取^ス也。之の例^ス也。工^ス
ハえいヤ云其モ工^スを長く引テ呼^ス。有^ス文^ス字ハ舊^モの字
も小頬娃^ニ也。書或ハ江居^ニ也。も書或ハ江乃^ニ也。

あ不疑あき小阿彌此郡の在処をも日向國アハ
形かよく尋ねて決不可愛之山陵在日向國宮崎ア云
弘治アズミ口決不可愛之山陵在日向國宮崎ア云
陵異氣甚盛而不得近焉是可愛陵也又或人云臼杵郡縣西三里有大
永井可愛村也云神社アリ傍百町餘山アリ絶頂小靈
石三尖山岩洞アリ是可愛陵形アリ又或人云今日向國
延岡の領内小山アリハち可愛也云
山アリ云阿彌山の腹アリ神社アリ御陵アリ何モアゼア
阿彌也モさざうシモアゼア又或人云臼杵郡高千穂
山の東南の方に稜の嶽也云山高アリ其山中ア连ニ藝
命の陵アリ乞云阿彌里人大石明神也甲子アリ也モア
云里何キモ古く故め跡也ハ聞え又書紀云久之彦
あ良也可愛御陵アハ非ジキギ鬼也
波瀬武鷗鷗艸不令尊崩於西州之宮因葬日向吾平
山上陵諸陵式小日向吾平山上陵彦波瀬武鷗鷗艸
不令尊在日向國無陵戶也阿彌廟陵記小今大隅國始

羅郡之山也云虽然承^{アラシ}和名抄小大隅國始羅
郡又大隅郡始臘熊毛郡阿枝^{アヒ}有^{アリ}_{アリ}此れ^{アリ}本^{アリ}より別處
良形^{アラカニ}者^{アリ}かく三郡小分^{アリ}も屬^{アリ}る地理を尋ねて決む
乞^{アリ}し又今世小肝屬郡^{アリ}始良又大始良^{アリ}也云處あり^{アリ}_{アリ}
御陵此等^{アリ}内^{アリ}在^{アリ}也^{アリ}薩摩國人^{アリ}の云く吾平山陵^{アリ}_{アリ}
の巖洞中^{アリ}あり此巖洞東方^{アリ}の向^{アリ}里^{アリ}内の廣さ三十步^{アリ}
歩^{アリ}あり陵上^{アリ}祠^{アリ}又中川を隔て前^{アリ}小廟^{アリ}鶴^{アリ}
戶權現^{アリ}也云て葛^{アリ}、れバ神代乃三御陵^{アリ}大隅^{アリ}や薩
不令尊^{アリ}祭^{アリ}れ已^{アリ}か、
摩^{アリ}少^{アリ}在^{アリ}是日向國^{アリ}ハあ^{アリ}也然る^{アリ}諸陵式^{アリ}何^{アリ}
也^{アリ}うち書紀^{アリ}小日向^{アリ}也^{アリ}る^{アリ}に記^{アリ}されあらより
也^{アリ}て後^{アリ}小國分^{アリ}きてハ日向國^{アリ}也^{アリ}之^{アリ}大隅薩摩の
其郡^{アリ}也記^{アリ}へも此三御陵^{アリ}のみ郡^{アリ}歴代^{アリ}の御陵皆
引^{アリ}つも日向國^{アリ}也^{アリ}をも書紀^{アリ}の文^{アリ}依^{アリ}きの日向^{アリ}
みを承^{アラシ}也^{アリ}知^{アリ}はして世^{アリ}に人^{アリ}もみあひ^{アリ}日向^{アリ}

國小のみ尋め氣うる彼國小今其ぞ彼ぞヤモ神代の御跡ヤ色々あらむ心得ぬらも形うさて大隅薩摩小此モは人もきそく心絶う又かゝこう他國人こモ耶ヤも稀ニ乳國形モバかのどう埋モア識人も多く是色仰うモ己はやくも此事ハ慮が概く思ひく以テ大隅薩摩小古を慕ふ人う逢テ」願が委く尋ねてバ必語傳すあり處のゆき傍きをも願い立り詮る小近文はゼ白尾齋藏國柱ヤ云薩摩鹿児嶋の人ノ書院神代山陵考ヤ云物を得て見るも小果してみる彼ニ國小阿毛りと今此御陵ヤもの注の中小薩摩國人ノ云々ヤモあるさて諸陵式小多々あるとみる彼説なるぞかし

大中
故到豐國宇沙之時

○土人ハ久延毘登ヤ
到豐國宇佐之時

小菟狹國造ヤマツチノサムライ也もあれ、アメニ字佐シマツをも國也云ハシマツシテ凡て後
の郡シマツやも郷シマツやも云ハシマツシテの地シマツとも上代シマツの國シマツやも云
是シマツ也云ハシマツシテ○宇沙都比古宇佐都比賣シマツハ兄弟シマツ也聞ゆ
也云ハシマツシテ那足シマツ○足沙都比古宇佐都比賣シマツハ兄弟シマツ也聞ゆ
名ハ地名シマツ小依シマツより書紀シマツハ行至シマツ筑紫國シマツ菟狹シマツ時有菟狹
國造祖号曰菟狹津彦シマツ菟狹津媛シマツ也云ハシマツシテ菟狹シマツを筑紫國
ノ若九國の總名シマツ乃意シマツアマニシマツ傳シマツ日向シマツも筑紫シマツ内シマツ有シマツレバシマツ
こ小分シマツ筑紫國シマツ也云ハシマツシテ阿倍シマツ傍シマツきシマツアマニシマツ也シマツ事シマツ
紀三饒速日命シマツ天シマツ降坐シマツ時供奉シマツ比神等シマツ乃中シマツ小天シマツ三降
命シマツ也云ハシマツシテ豐國宇佐國造等祖シマツ也以シマツ又十國造本
紀小宇佐國造櫛原朝高魂尊孫宇佐都彦命定賜國造
也云ハシマツシテ此說シマツ也若據シマツ天シマツ三降命シマツ也云ハシマツシテ高御魂
尊乃御子シマツ名シマツ字シマツ也シマツ○足一騰宮
都比古シマツ其シマツ所シマツ也シマツ○足一騰宮

稿根津日子

○告國傳

傳のこぢ又

既上
卷之出於書紀此御世二年純處小春二月甲辰朔乙巳

天皇定功行賞云々以珍彦為倭國造
此人前小椎根津彦也云名賜了其後所云皆其名
を乃み云るゝ此不至立帰了更不又初名をあす了
珍彦也云承ハ以うい又珍彦乃訓注ハ初不出ゆる處
尔所うはて天尔今此尔あるもいかじ○舊事紀十國造
本紀小東征時於大倭國見漁父謂左右曰浮海中者何
是物之耶乃遣栗忌部首祖天日驚命使見之還來復命曰
是有人耳名椎根津彦即召卒来矣天孫問汝誰哉對曰
吾是皇祖彦火出見尊孫椎根津彦也云又六卷尔故
遣女弟玉依姬命以來養者矣即為御生一兒則武位起
命矣尔武位起命大和國造等祖也云承ハ椎根津彦

を彦火：出見尊の孫武位起命比子やせらるり此説
信がくし若彦火：出見尊乃御孫あらば此人乃後胤
の姓ハ姓氏錄尔天孫の部尔收き例なら小皆地さ
祇部尔收きとは元来國神の子孫あるこも明けし
足師木水垣朝御世七年小夢旂諭あり一尔依て倭直
祖市磯長尾市を以て倭大國魂神を祭主也志給アリ
此處名波倭直祖也云こちハ見かざれども玉垣朝御
世三年又七年乃殷尔倭直祖長尾市也見也あり倭大
國魂神乃御東ハ傳十二卷ルカはレクニモ考見傳し又此事一傳名波師木玉垣
朝御世廿六年比事也凡そ詔うハ大倭直祖長尾市宿
地を定神地於穴磯邑祠於大市長岡岬也阿リ此穴磯
嘆傍爾シキヤ假字を何あるハ非ナリ字あり窓アラ
ナジヤ訓傳しされぞ崇神紀尔市磯長尾市也ある也
照して思是窓穴ハ市乃誤名もや阿リ年又長尾市也
以ふは長岡岬乃地名尔誤名也あらむ共尔書紀み見かあり此長尾
依き名名也あらむ

市檣根津日子の末アリ大倭國造の先祖ナリを此人
より始て大倭大神を以祭く神主也歎りて後モア此
氏人相傳て以祭モナツより次尔仁德紀尔倭直祖麻呂又倭
直吾子龍見ゆ雄畧紀二年殷尔も大倭國造吾子龍宿
祢也云人見也欽明紀尔倭國造子彦也云見かあり也
て天武天皇十年四月己亥朔庚戌倭直龍麻呂賜姓曰
連これまぢハ直姓ありそは欽明紀まぢハ國造也乃
連みありて直やはあきを此ル加くあらば何きの御
代より直姓ナハあれり掌も此記尔倭國造等之祖也有
ある等字小依き爲始ハ此氏人耳あ國造也云姓ナリ
程乃語を以云る外ナリテ直姓ナリアリ是其中
は補されし者也傳し同十二年九月乙酉朔丁未倭直

賜姓曰連十年の時小連アシあれハ龍麻呂一人乃
足しを此度其餘乃人も連爾あれ乎耶是同

十四年六月乙亥朔甲午大倭連賜姓曰忌寸或ハアヂ
倭也見有或ハ大倭也見有大アヂ言乃有無定乎
此程まではさもあり言む後アヂ必定あれ乎詰也
あきて續紀六尔以從五位下大倭忌寸五百足為氏上

令主神祭神大倭大神也見迄九卷尔大倭國造大倭忌寸五
百足也あり

是尔て固造ハ此氏人乃中小
殊一人あり詰也あらばして天平九年十一月壬辰大倭忌寸小東人同水守二人賜姓宿祢

自餘族人連姓為有神宣也自餘族人乃連姓を此時小
族も有アリ也同十年閏七月段尔大養德宿祢小東へやあ
るも傍アリし

モ是ハ天平九年十二月尔改大倭國為大養德國也而

至て國名の文字を如カク此改うれル尔依て此姓も其字
尔改し尔り同十九年三月尔又舊乃如
之大倭國也せル也 同十九年四月
段小大倭神主正六位上大倭宿祢水守授從五位下也
見有此氏人大倭神主也
いふこ也 坐ス見ゆ同廿年正月壬申朔甲戌大倭

連深田魚名並賜宿祢姓天平勝寶三年十月丁巳大倭
國城下郡人大倭連田長古人等八人賜宿祢姓神護景
雲三年十月大和國造正四位下大倭宿祢長岡卒五百
足之子也云 晉寶年中改忌寸賜宿祢云 や阿リ咲
尔至て倭字を書シし和也作カタ尔天平勝寶のころ
國名の大倭字を改て大和カタせル爾カタ此事委カタ考アリ別

尔記せり又やあやお大字を添て大倭大和な。や書る
ハみかホボヤマトモリモニヤアリアドヤマトモリ
ヨリハナリロシレバアドヤアモリ姓アモ其より此字
ヤ云リハ大字を添て書もリ。姓アモ其より此字
を用ひ。後世の如く意ニ任セテ姓氏錄小國神
別地大和宿禰出自神知津彦命也。神日本磐余彦天皇
祇

從日向地向大倭國到速吸門時有漁人衆艇而至天皇
問曰汝誰也對曰臣是國神名字豆彦聞天神子來故以
奉迎即牽納皇船以為海尊仍号神知津彦一名雅根津彦能宣
軍機之策天皇嘉之任大倭國造是大倭宿禰始祖也。や
見えあり又根津國神別地祇大和連神知津彦命十一世孫御
物足尼之後也統紀廿九小根津國菟原郡人倉人水守等十八人賜姓大和連也。阿ハ此族爾

赤石連を賜ふ是毛大和氏の支別ある也。して又姓和
氏錄根津國同部尔物忌直椎根津彦命九世孫矢代宿禰
津彦命之後也。見近又河内国神別地祇部尔等祿直椎根
也。でも見ゆ。さて續後紀承和七年八月甲辰朔己未
大和國人戸主從八位上大和宿禰吉繼戸口掌侍從四
位下大和宿禰館子等賜姓朝

登美

和國城上郡等弥神社又添下郡登弥神社二所見え
ある中少今ハ城上郡ある登美みて今世小外山村穴
いふぞ此名の遺れ也。地する即神武紀既末乃立靈

さて此地名神名帳小大

時於鳥見山中其地号曰上小野榛原下小野榛原用祭
皇祖天神焉や西も榛原ハ今世小萩原也云驛ある
村長谷の東方ふく今ハ宇陀郡尔入て彼外山村をハ
や遠まれ今も古登美をいひハ廣末名や聞ゆれ
ば彼驛の所よりまでか希て鳥見山中を云むこそ違ふ非ド
見山中を云むこそ違ふ非ド 天武紀十八丁小迹見
驛家を有るも此登美なりかの迹観驛ハ飛鳥宮より
次をれ皆今ハ外山村乃泊瀬小幸て還坐をり此路
所よりあくよく叶すり又式する城上郡の宗像神社
此こやと元慶五年の官符尔類聚三代坐大和國城上
郡登美山や西り此神社ハ今外山村小西也 又万葉四
四十、三十、七丁など小跡見莊やいひ射目立而跡見
九丁、八三十九丁など小跡見莊やいひ射目立而跡見
乃岳辺之やよあるも司じ登美なり其故ハ八卷小跡 見田莊作哥ニ首

セ題て其一首小吉伯等乃猪養山をよ先り吉名張ハ
今も城上郡ニ在て其村彼萩原小近處なればなり
さて添下郡を登弥ハ今も鳥見莊や云處みて書紀
作途見池や見え續紀六ニ大倭國添下郡人倭忌寸果
安云_ニ登美箭田ニ御云ニヤ_ニモ_ニハ_ニ登弥_ニ果_ニア
又斑鳩ハ富乃小川ヤいふも_ニモ_ニハ_ニ登弥_ニ因_ニ名_ニア
斑鳩ハ平群郡うれぞも此川添下郡より流ゆ_ニモ_ニ
此の登美_ニハ_ニ文

日下〇日下ハ久佐訶_カ訓て地名あり是ハ河内國河
内郡ある日下_{クサガ}久佐訶_カ源_シ河内郡ある日下ハ
古書尔多く見るく

名高一其處の事ハ下卷雄畧段云也一又其故ハ難
日下也書く文字の海モナガヤモ彼處小云も其故ハ難
波海をば過てなハ海路を幸行て泊賜すラ津なれば
必難波より南方みて海邊あるはれハ那室故恩尔
和名抄小和泉國大鳥郡小日部倍人佐
日部神社もあり此郷今草部村也云是實ハ日下部
みて此の日下ハ是なるはれし下字を畧て日部や書る
二字小約して書例うて大和の葛城上下郡を葛上葛下
磯城上下郡を城上城下や書や同ド然るを和名抄尔
久佐倍也あらハ佐下小加字脱あらウ又今も草部や
云を以見き第和名抄の下わざり既く訛て久佐倍也
云々子ふう如何小ずれ元ハ久佐加倍なりはれし日
下や二字連続く了そ久佐加也ハ讀免日字のみを久
佐也讀免田也春日を加須賀也よ免也て春一
字を加須也ハより准也を思穿さて又今も草部村ハ

海辺ノハ非ざれザレニシモ遠カニ文古ハ海辺まで
クナムラ廣き名なりまも又日下ヤリ日下部ヤリ通
云泉ノ下巻雄畧天皇の大御哥尔日下山を久佐
加能許知能夜麻也ヨリセ賜守承ナギ例あヒナリ
玉垣宮殿ノ日下之高津池也阿モ此日下ナリ後し
彼池を書紀ノハ高石池也アリ高石も同大島郡北海
邊也モゼカノ此高津也高石也を合せく恩子傳古ハ
高石乃何アリモ日下也云一説モ
アリ承さモアハ高津の津字ハ師の誤アリテ此記アリ
モ高師池アリトモアリモ又此時アリ大御舟の泊リ津也
也高津也云先地名も似乃クハ一まれバ何キアリ
モ大島郡小日下アリト據リテ此高津池也或
說小河内國あり日下村亦在也いハ和泉尔又姓氏
モ日下有レアモアリト据リテ此高津池也或
錄和泉國皇別ノ日下部首ナリ日下部モヤ云姓アリ
是等も日子坐王の御末アリ河内國の日下部氏也元

は一なり 河内國の日下部氏乃事ハ伊邪河宮段ノ委ニ云傳し故恩ル彼日下部
氏の人等分て此和泉國大鳥郡ムも住ケル族ノ廣
ニテより其處の名をも日下モハ云け年ざれば和
泉ふとも元ハ彼河内の日下より出ある地名なるば
し書紀トハ三月丁卯朔丙子遡流而上徑至河内國草
香邑青雲白肩之津夏四月丙申朔甲辰皇師勒兵歩趣
龍田而其路狹嶮人不得並行乃還更欲東踰膽駒山而
入中州時長髓彦聞之曰支天神子等所以采者必將奪
我國則盡起屬兵徵之於孔舍衛坂與之會戰やあらは
此記の趣也異アリ 事記遡流而上ヤ云ル詔ヤツヤ心
行ハ草香ハあやヒ河内の草香尔

レても難波より遡^{サガハシ}、至泉處^{アヘ}、笠甚く地理も
がすり况や和泉をもキヤ故おも^{アリ}、こは地理をも
思ハズアリ、安小潤色小書添付れ^{アリ}文アリ、アリム
思泉を此文アルテ白肩津ヤハ今北牧方ナリヤ云
然說もあらはい、く非なりさ^{アリ}、河内國モ阿^{アリ}、爾
依て草香を河内國河内郡ナリ日下ヤのみ誰も思ひ
居るも誤^{アリ}、河内の日下ハ海辺^{アヘ}、ざれバ船の泊
所處^{アリ}、又川^{アリ}、も津ヤリ、無き地あれヤモ加の
日下ハ船通^{アリ}、又川^{アリ}、必海辺ヤ間名^{アリ}、和泉乃
肩津草香津を云ムハ、さて和泉の地も舊ハ皆河内
日下あり、こヤ疑ひアリ、さて和泉の地も舊ハ皆河内
國ナリ、を別ハ一國ヤセ^{アリ}、ハ靈龜ニ年よりの
又更欲東踰^{アリ}、巴古傳^{アリ}、河内國ヤ云ル、こヤ論アリ、さて
星其故ハ龍田^{アリ}、行も伊駒山^{アリ}、行も共小東^{アリ}
又駒の處^{アリ}、わよて此字ハ置^{アリ}、夷^{アリ}、す^{アリ}、伊

始置和泉監焉

紀國上卷ふ出〇男

之水門神名帳より和泉國日根郡男神社^ヲ二和名抄より同
郡呼んで乎郷^{アリ}今より男里村^ヲ云何より男神社も即此
稱男森明神一座彦五瀬是なり日根郡ハ和泉郡の南
命令稱濱天神やいすり^ヲ是なり日根郡ハ和泉郡の南
耶れば此も路次よく合是但紀國やあらは傳の誤を
麗矣^{アリ}或說より雄山^ヲ云處何より昔より日根郡なり^ト成
岩山小雄町^ヲ云何より竈山^ヲ間三里許何より^ヲ云是此
等も由ありげか^ハ聞ゆ免れ^ガ矣^トかう古書^ヲ見え
ざれバ取^{カシム}
又ハ古は紀國^ヲの堺^{アリ}て男郷^ヲ猶古ハ
此郷紀國小屬^{アリ}も知^{カズ}^ト今^ノ男里より西南方
今道五里餘もあれやも正南^{アリ}大道を行バ国堺まで
なり。書紀^{ヨリ}此地を茅渟^{アリ}山城^ヲ水門^ヲありて亦名山
井水門^ヲ何^{アリ}是も疑^ハ其故ハ茅渟^ハ古ハ^ニ也廣
き地名^ヲハあり^トかやも^トの男里の所^{アリ}古ハ^ニ也廣

小距より其う宣崇神卷小茅渟縣陶邑也而陶ハ今
ハ陶器莊也て大鳥郡なり又式子山井神社も大鳥
郡ナレバ日根郡の男郷也
ハいよく遙あるものを也

石上神宮

五十六葉モ

采目歌

書紀

宇陀能多加紀尔の哥乃次小是謂采目歌今樂府奏其
歌者猶有字量大小及音声巨細其古之遺式也也
其儻儻の狀を云承あり其續紀小天平勝宝元年十二月
由上ヲ引て委くいすり續紀小天平勝宝元年十二月
小東大寺ニ行幸て佛事行ハセ賜守時又同四年四
月小同寺の大佛の開眼ミタヒカシ日行幸ミタヒカト時あや種
種の音樂あり室中久米儻もあり一詠也見ウタミ
也當時もよろこはか佛事おも吹舞其後ハ大嘗會
モ仰りまれバ他節たのもひやう傳つらシ其後ハ大嘗會

小見也アリ三代實錄小貞觀元年十一月十六日丁卯

大嘗祭云十九日庚午撤去悠紀主基兩帳天皇御豐

樂殿廣廂宴百官多治氏奏田舞伴佐伯兩氏久米舞安

倍氏吉志舞内舍人倭舞入夜奏五節並如舊儀元慶ハ

嘗會乃處了も如其カク見也ありさて其儻儻を伴佐伯二氏
の仕奉ふハ久米部ハ後ア大伴氏の下小属分故あり
佐伯ハ大伴より分きトヨ氏トヨシ貞觀儀式踐祚大嘗祭午
あり其等の事止了委く云々貞觀儀式踐祚大嘗祭午
日段小伴佐伯兩氏率舞人入自儀鸞門左伴氏右佐伯
分而列トヨシ乾中庭床子所司豫設奏久米舞サムニ金作劍廿
口右久米儻儻料あや見ゆ北山抄同年日條ふ也右の如

く阿リて舞人廿人琴工六人新式云所司設五位并彈

正琴床子又設琴臺床子寛平記云王四人著緋衣末額

劍靴承平記云於舞臺東供奉舞人在前後端者服四位

袍中間服五位袍皆帶劍絡頭拔劍舞無歌以琴為節舞如駿河舞彈正琴や阿弓ハ彈琴工の誤終ハ絡の誤か
記録あや小往く見ゆあるも大抵右乃如ノ兵範記仁安三年十一月廿五日壬午云一獻國酒奏笛歌次伴佐伯兩氏奏久米舞悠紀方行之兩氏五位着小忌列之舞入サ人著冠退紅袍半臂下襲白袴冒額劍等琴工六人從之於舞臺北列舞舞如駿河舞次蛇見ゆあり近世安倍氏奏吉志舞主基方行之云云承平記又江次第か小至弓は其傳絕て傳はく文也北山抄小引きく承平記又江次第か
や小無歌也阿毛號當昔既く歌抑初國所知看一天皇は絶て舞の久遺きりしより

の大御代より始よりてさるあり哉であかりし樂の絶

はてぬるは可惜しやも

可惜しく哀しやも哀し

通藝速日命

追參降來やは迄ニ藝命化御跡を追て天より降來ふ
なり天より降るを參云ふハ常の例小違すれども
うは迄ニ藝命既小姓國小降居坐ふ故尔其方を
尊みて參也書紀此卷首小抑又聞於贊土老翁曰東有
美地青山四周其中亦有乘天盤船飛降者云ニ厥飛降
者謂是饒速日欵や見ゆ又終ふも及至饒速日命乗天
盤船而翔行大虛也覗是御而降之故因目之曰虛空見
日本國矣日本國やは畿内さて其迄藝速日命ハ天上

より降れる神あり詠やハ論をまれども
ある氏くは皆天神部小載せ續後
紀八ふも天神饒速日命や而り何神の御子ヤモ知
難し姓氏録あやふも御父思ふル天照大御神比御子
孫あは非了他天神の御子アル也し其故ハ姓氏録の
天孫部也ト他天神比子孫を第天神部セサリム神
神地祇乃三所アリて天照大御神比御子孫の氏くをバ
の子孫乃氏くは天孫小收文して天神部セサリム神
雖然あす舊事記ト天忍穗耳命乃御子天火明命を以
跡速日命ヤセラは甚く古書ヤモの趣小達ひくさて
全偽説ある由傳十五の九葉小委く辨ふゲ如クさて
從乃北神の天降坐し時乃事を甚嚴重く記して三十ニ人
御孫命の天降坐し時の御供奉の神あちあく古記
傳子あるゲ埋れて遺れりを竊取ル珠也

藝速日命の事小傳アヒダをあせり家記カイジさて此神の天より
を取て記せる物モノもあそ見ミれ
降坐トキシテ—時代ハ御孫命の御天降アマタマツキは後天皇の日向
入り發坐アマタマツキ—時多リハ遙アマツシ前ある傍アマツシくして其中間何
時のほややもゆじくみ波知アマタマツキ御孫命の天降坐
あや阿アマは追續アマタマツキてあやなく降也アマタマツキ如くアマタマツキ聞アマタマツキて追アマタマツキて降
ぞも然アマタマツキハ非アマタマツキ先御孫命の降坐アマタマツキて後アマタマツキ又同アマタマツキド如降
きアマタマツキ故アマタマツキ小追アマタマツキてやハ云アマタマツキあり其間幾許年アマタマツキを経アマタマツキて後の変
也アマタマツキ知アマタマツキ天皇日向小坐アマタマツキ而アマタマツキや小往昔倭國
冥珠アマタマツキ神の天降アマタマツキま岸アマタマツキ神アマタマツキを齧アマタマツキ食アマタマツキ已アマタマツキいよく近アマタマツキき事アマタマツキの
如アマタマツキくも聞アマタマツキ也アマタマツキ抑アマタマツキ此アマタマツキ也アマタマツキ神代の際アマタマツキされ傳猶人アマタマツキの命長
きアマタマツキも阿アマりぬ傳アマタマツキ事アマタマツキバ珠アマタマツキ神アマタマツキも天降アマタマツキて後數百年アマタマツキ存アマタマツキ在アマタマツキて天皇アマタマツキ亦アマタマツキ仕奉アマタマツキしも知アマタマツキがアマタマツキ舊事紀アマタマツキハ饒速日命アマタマツキは
既アマタマツキく薨アマタマツキて天皇アマタマツキ亦アマタマツキ仕奉アマタマツキ小娶アマタマツキハ子の宇摩志麻遲命アマタマツキせれ
也アマタマツキも登美鬼古アマタマツキ妹アマタマツキ娶アマタマツキ其登美鬼古アマタマツキも猶存アマタマツキ在アマタマツキ
むも何アマタマツキハ疑アマタマツキは年アマタマツキ

是を以見も彌矢又鞬ちやの類も天上のハ尋常の制
也近遙ニ勝也之故てあく貴き物ありまを計て天皇
乃天表を見て益蹠踏一を思すバ天孫命の御物ノ又
更小絶異あるから知るもゝう内了舊事紀よ天神御
祖詔以天皇瑞室十種授饒速日尊云々あ、宇摩志麻御
治命以天神御祖授饒速日尊天皇瑞室而奉獻於天孫命
云々あ、饒速日命自天受來天皇瑞室同共藏齋号曰
石上大神云々あ、云尼思ふ予此十種神室を授かり
賜すりとも実みは迄々藝命あるを例の傍ア了迄藝
速日命や勢りや但し垂仁天皇の御代より石上の
神室を物部氏の掌をりは元來此十種神室の由縁も
有り故クヤモ聞ゆれ皆此ハ实ニ饒速日命の持來し
矣もあ、むク岩然底バ今此ハ小天津瑞也云物ハのの
天羽々矢歩鞍のみあ、矣此十種神室も其中ふ
ま事ナ種神室の度ハ傳十のサ七葉小云も

謂
酒體

十日奏御ト事見内裏式

古語拾遺云至于難波長柄豊前朝白鳳四年以小花
譯諱齋部首作斯并祠官頭令掌叙王族宮内礼儀婚
姻ト筮之事夏冬二季御ト之式始起此時作斯之亂
不能其職凌遲衰微以至干今云々弘仁宮式云凡
御體ト者神祇官中臣率ト部等六月十二月一日始
齋ト之九日ト竟十日奏之神祇官侵土諸司可令勘
即令外記先中大臣神祇官后祐奏案進大臣訖大臣就殿
正座中臣官人奏折事見神祇式弘仁神式云ト御牀辟保日

麻義

ト

卜庭神祭一座右所司預申官々頤告諸司若有侵
土者具注移送即中臣官二人宮主一人卜部八人並
給明衣中臣細布宮主以下調布自朔日始十日以前卜訖奏領其
日平旦預執奏文納染而置室上俟於延政門外即副已上執
奏案進大臣三昇殿上宮內省以奏訖出之神祇官稱
唯伯與副若祐昇案入置庭中簾上勅曰參秉伯稱唯
共昇案置殿上簾子敷上中臣官便就版位自餘退出
內侍取奏文奏御覽畢勅曰參秉中臣官稱唯昇殿上
上座披奏微聲奏勅曰依奏行之大臣稱唯次中臣官
稱唯退出閣司昇殿撤案置簾上神祇官昇出國史云

元慶八年六月十日天皇御紫宸殿神祇官大副從丘
位上大中臣朝臣有本實昇殿讀奏御駄御卜左大臣正
二位源朝臣融行事其儀注具別式承知以後是儀停
絕此日尋舊式行之

十一日云：

同日神今食祭事 見儀式

高橋氏文云太政官符神祇官定高橋安曇二氏供奉
神事御勝前行立先後事右被右大臣宣稱奉勅如聞先
代所行神事之日高橋朝臣等立前供奉安曇宿称等
更無所爭但至于飯高天皇御世靈龜二年十二月神

今食之日奉膳從五位下安曇宿御刀詰膳從七位上高橋朝臣宇具須比曰刀者官長年老謂立前供奉此時宇具須比云神事之日供奉御膳者膳臣等之職非他代之事而刀猶強辨乎具須比不肯如此相諭祠於內裏有勅判累世神事不可更改宜依前行之自尔以来无有爭論至于宝龜六年六月神今食之日安曇宿御刀詰廣吉強進前立與高橋波麻呂相爭挽却廣吉事畢之後所司科秋于時波麻呂固辭無罪何共為秋是言上御更有勅判上中之秋科廣吉訖其後廣吉等妄以偽辭加附氏記以此申聞自得為先因茲高橋朝

臣等雖不敢披訴而憂憤之狀稍有顯出大延曆八年為有私事各進記文即喚二氏勘事因搜檢平紀及二氏私記乃知高橋氏之可先而經先朝不忍卒改恩欲令一先一後彼此無憂雖未勅所司而每臨事祭宣知二氏遞令先後向今內膳司奉膳正六位上安曇宿御刀詰成去年六月十一月十二月三度神事頻爭在前猶不肯進仍勅應递先後之狀比來類告既宜此度依次令高橋先向繼成不奉宣勅直出而退竟不供奉為臣之理豈如此乎宜稽故當以定其次兼諭所犯准法科斷者謹案日本紀卷向日代官御宇太足彥忍代

別天皇五十三年巡狩東國渡淡水門是時司覺賀鳥
之聲欽見其形季之出海中仍得自吟於是膳臣遠祖
名磐鹿六雁高橋以蒲為手繩自吟為膽而進之故美
六雁臣向賜膳大伴郭檢其家記畧同於此是高橋氏
奉領御膳之田也及輕島明宮御宇營因天皇三年處
之海人訟吮之不從命乃遣安曇連祖大濱宿祢平之
日為海人之寧是安曇氏預奉御膳之由也久安曇宿
祢等歎云御問城入彦五十瓊殖天皇御世已等遠祖
大榜成吹始奉御膳者仍檢其私記文追註行下筆迹
殊拙不庶寧軒訴之端於是見矣然則考之國史求之

家記磐鹿六鴈委質於前大濱宿祢策名於後時經丘
代口逾三百相去懸遠更无可疑先後之次事已灼然
理須以高橋安曇^{為先}在後又繼成固執爲記臨事爭先恣
意遁去遂不堪奉不承詔命無人臣禮此尚不正何以
繼後仍案藏制律令云對持詔使而元人臣之礼者絞名
例律云對持詔使而元人臣之礼者為大不敬又云犯
八虐獄成者除免者今繼成所犯准依律處絞刑令除石謹具
狀奏聞者奉勅宜宥其死以處遠流自餘係奏者官宜
承知以為永例待到奉行延暦十一年三月十九日弘
仁神祇式云供神今食料新三、右供御雜物右附內膳

至水等司神祇官人率神部太朝又兩般參入內裏供奉其事

群書類從卷第百三

公事部廿五

新任弁官抄 権左中弁

神宮解狀事

太神宮祐宣等言上
鹽多宮祐同等言上

謂謂也內外也

已上皆副祭主解申上之無祭主解者不申
又有次第解祭主以奏狀付官乞付職事也

又肩次第解祭主以奏狀

據異等時迎歸
神宮事目可知之仍趙
正殿事一字也即殿也
南向卽西屋也

相殿于正殿中

東西寶殿二字也在正殿之前子序也二丈許立棟指社以板組上舊神寶取納西寶殿幣緒奉納
東寶殿幣錦奉納正殿東西
寶殿是倉坎可尋在瑞籬內
外幣殿損一字也神寶帶帛納此殿作樣如東西寶殿後瑞籬玉垣等外也舊
正殿白木也有木瓦金物餘不然千木堅黑木皆在
子不如鵠風湍如雁侯堅魚木以丸木切火橫置棟
上也正殿以下皆以萱草之以薄穗莖草之也厚二
尺餘云之瑞籬之中正殿東西寶殿三字有之也

次乃至垣之中無屋

瑞籬玉垣等皆有御門瑞籬御門第六門內玉垣御
門號大東西北三方者相去六許尺外玉垣御門號

御門第
也此
外三
重鳥
居也

內瑱玉王外

御子殿二宇西面在東面御祭齋王參御此東殿

次荒垣之内

夕幣展見上

膳同供于多

子娘四人外
鳥居

外院

一殿一字之立

之立有酒間

四度幣并公卿

使中臣以上居

神於官殿忌部卜

九文殿神部以下看也

御輿宿齊王御宿也

已上檣皮葺無板敷

廳一字在地

忌屋殿有廳東調備御膳之所也

子娘館在忌屋殿北

御倉二字在廳後

御稻御倉一字在廳前角

已上号外院此外有惶外院有內院東北二方內

院南面有池号御池

已上外宮也內宮殿舍一同之但外院在西方又無忌屋殿云々內宮有蚊屋殿始御輿宿在外院內宮

在東外宮在西相左世六丁云：

續麻織殿在續麻鄉

服織殿在服

已上兩殿去外宮百町許欲四月九日十四日織口布如納持參納東寶殿也

別宮号事元七所今

所也

外宮

高宮或云多賀宮去外土宮河為別宮之宣土宮長庚比云々可尋

內宮

荒祭宮去外院七八

月讀宮

伊比那岐宮二宮御一所去

伊雜宮去內宮半日

龍原宮

並宮御座一所去

離宮院驛家也勅使着之齊王參官同御此處自外宮至離宮院三十六町自離宮院至齊宮寮又世六町云々

齋宮寮

内院御之

外院萱葺屋五六十

中院已上增改

寮頭在此

祭主

十二司有闕者以寮解申請被宣下云之別當宣旨

内侍宣可尋

官司三人大官司權大官司少官司已上

中臣氏大官司少汎封戶等事

正祿宜

内宮七人荒不因神司主也外宮七人度會神主五位以上以宣旨補之

正祿宜十四人有制不上治不渡櫛田川以西在齋

宮西也

權祿宜不定數或及百餘人云々

火内人内外官近代不定數二姓任之同祿宜近代一

一宮各百餘人六位補之兼權祿宜有阙祭主

玉串王串奉之職也仍號之但勅使二八不奉王串等

奉鬢木綿許也王串神枝付木綿也齋王取之奉給也

宮掌

卜人也但兼大人也內人

番檢所达祿宜等

給番之賦也

内人

祝

已上神官如此

内宮御前有御衣川即五十鈴

爪川也

内宮御坐于度會

那宇治鄉外宮山田原

五十鈴川上下津石根

伊世宣命一通也而中臣參外宮時加押紙五十鈴

川上う山田原下津石根ト讀云々

廿年一度遷宮任造營便中臣事

次為職事并官者尤可知神宮粗紀之

群書類從卷第百七

公事部廿九

內局柱礎抄

從四位上
丹波守臣親康
式五朝

正五位下

賦六
示氣朝臣親就
無五
宿祿友員舞

豐原朝臣紵秋舞人

從五位上

三善朝臣有衡

從五位下

國宿禰守法入內

橋朝臣三就氏

玉手朝臣持充

從一位 藤原朝臣
富年給

高階朝臣賴國

明應四年正月五日

應永世三年正月六日薩戒記云豐原村秋太神景藤者元將監也而內記註式仍式書載式部下石屋此事依不審向納言紙言無被考旨

同記云後日大外記師藤勝朝臣來云楨本國及是外衛爵也同可為兵叙人歟云々

大同書

太政官

大外記正六位上三善朝臣為任少外記正六位上中

原朝臣廣能權少外記正六位上中原朝臣仲信

左大史正六位上清原真人祐定右大史正六位上中

原朝臣賴直左少史正六位上中原朝臣憲良

右

少史正六位上高橋宿祢信弘

中務省

內舍人正六位上

多朝臣景節

父忠節賞讓

內舍人正六位上大江朝臣長季

久壽大嘗會圖書案行事所功

少允正六位上大江朝臣久基造

少允正六位上中原朝臣安資向者鑿殿寮
少允正六位上惟宗朝臣忠國明法陰陽寮生舉陰陽師正
六位上中原朝臣憲清連權漏刻博士從五位下芳野
朝臣季親連大學寮奏少屬從七位上中原朝臣景能密
助教從五位上中原朝臣廣季直教從五位下中原朝
臣師尚諸陵寮少允正六位上中原朝臣重業明法得
民部省大丞正六位上紀朝臣久明少丞正六位上物
部宿祿宗國少丞正六位上中原朝臣有安主計寮少
允正六位上笠宿祿國政主稅寮少允正六位上中原
重景寮宮內省少錄正六位上中原朝臣反重省大坎
重景寮宮內省

助正六位上源朝臣義重女御藤原朝臣
琮子去年未給典藥寮女醫
博士從五位下丹波朝臣賴基醫道醫師正六位上中
原朝臣言改臺内膳司典膳正六位上惟宗朝臣成俊
舉琴彈正臺少忠正六位上中原朝臣俊重少忠正六位
上中原朝臣範安石京職少進正六位上三善朝臣兼
宗藏人和泉國目從七位上物部宿祢真元中宮權大
夫藤原朝年給相津國大祿從七位上賀茂朝臣末廣上名伊賀
使國大目從七位上中原朝臣成真元品璋子内伊勢國
祿從七位上漢部宿祢武行中宮當尾張國少
位上太甲臣敦里北堂下總國祿分正六位上惟宗朝
舉年御給

臣成隆常陸國大祿正六位上豐原朝臣時景舍人近江國權介正六位上中原朝臣重薰太皇后宮
差狹國祿正六位上橘朝臣俊光當時被申文章加賀國少祿正
六位上中原朝臣成教生文章趙中國少祿從七位上起
朝臣貞光元品妹子內親王當年給丹波國介從四位上賀茂朝臣
在憲但馬國少目從七位上紀朝臣牛忠奉議源朝臣當年給
隱岐國大祿正六位上秦宿舍人祿松國本籍播磨國大
祿從七位上紀朝臣友以曇年給大祿從七位上出雲宿
稱為次二令所任少祿從七位上紀朝臣盛行停皇嘉門大
院去保元御年給少祿從七位上立花宿恒末進物執事
給美作大祿改仕

事大目從七位上立花宿院籍祿貞薰內豊陽成少目從七
位上安倍朝臣武元元品妹子內親王當年給少目從七位上上總
阿祇奈正勝助美福門院美作國祿正六位橘朝臣國定
學館院備前國大祿正六位上清原真人為薰內豊少目從七位上
國大祿正六位上中原朝臣藏次喚內豊大祿正六位上物
部宿校書殿安藝國祿介從四位下丹波朝臣
知康兼大祿正六位上日前宿院安女御藤原朝臣當年給少目從七位上佐伯宿御藤原朝臣當年給周防國介從五位下中原朝臣師茂大祿從七位上坂
上宿信直太皇大后宮少目從七位上佐伯宿御藤原朝臣當年給少目從七位上秦邑才牛平言藤原納言當年給久女御藤原朝臣少目從七位上秦邑才牛平言藤原納言當年給琮子當年給

朝臣當紀伊國少祿正六位上宇治部宿祿則忠殿璽
年給權祿正六位上清原真人宗景_等學院淡路國
位上和氣朝臣定世_兼讚岐國大祿正六位上清原真
人貞方_{明經}年舉道祿正六位上秦宿祿延貞_{美福門院}
正六位上中原朝臣信弘_{大舍人}伊豫國_{當年御給}大祿從七位
上秦宿祿國里_{當年御給}大祿從七位
肥前國介從五位下惟宗朝臣孝資目從七位上立花
宿祿牛里_{民部卿藤原朝臣去年未給}肥後國權介從五位下中原
朝臣惟弘大祿正六位上三善朝臣長基_{民部卿藤原朝臣當年給}
{二合}左近衛府醫師正六位上中原朝臣有重{醫道奉}大祿從七位
所任

右近衛府將監正六位上源朝臣賴朝_{兼石兵衛府志}
正六位上惟宗朝臣佐景醫師正六位上惟宗朝臣時
基醫道奉

保元四年正月廿九日右大間於右府亭覽之次
令書寫了彼先祖後三公_{保元內府}公教執筆之大間也賴
業真人大間書也文字一段大也以作字書之之
天文十三年二月廿二日權中納言惟房

傳宣草上文保元年三月四日宣旨正五位下清原
真人仲方宜任助教正五位下清原真人賴光宜任直

助教中原師世辭退
替候也

講正中二年十二月七日宣旨從五位上安倍朝臣時
光宣任陰陽少允正六位上惟宗朝臣尚盛宣任陰陽
少屬正六位上惟宗朝臣尚村

正六位
上伴朝臣重世宣令任陰陽師應長元年十二月六日
宣旨宮內丞中原重延宣任左衛門尉同日外國司從
五位下安倍朝臣親顯宜令任美濃守延慶三年左衛
門少忠中原章枝轉大忠左衛門大忠紀政弘遷大
藏人左近將監原仲嗣宜賜兼宇事四月六日
延慶章六難
少内記高橋守職兼任左衛門少尉事八月八日トアリ

保二年二月廿日宣旨前隼人正清原繁隆宣還仕從

太外記局

鞆上

宣旨

儒氏申請以迄

秀才課試

宣旨

文章博士菅原在登朝

文書傳

文書

是又年月文保十難定^{ト但}四月廿右衛門權佐資名トアリ
立位下中原章香叙留父^{章文任人}退捕賞讓去夜除目之次所
叙從五位下丹波相典名字可為朝典之由所被仰下
橘氏申請以正二位行權太納言藤原朝臣定行氏畧
事^{依事繁略}副款收仰依請右宣旨早可令下知給之狀如件十
二月廿日左衛門權佐光經奉文章博士菅原在登朝
臣申請回准先例令課試文章得業生正六位上大江
朝臣進房事^{延慶二四年七月廿七大外記}大外記良^良緩急之時急收宣旨被下第二外記達大
外記良^良丹波尚忠除服出仕事^{正和元年七月一日トアリ}若人方博つ
少扇羽以具欽爵事^{延慶七年元七月二日トアリ}元亨二年十一月廿一
日宣旨正五位下丹波長夏從五位下中原秀改已上

職事官相因と併せ得狀

元祐二年十一月廿三日位記永陽門院

或外^{シテ}内官未給二人以正六位上為信朝臣曉寫狀

叙爵事

在御狀

正和二

上卿奏覆奏文

名記節申

永陽門院

色

止年^ニ内官未給二人以正六位上為信朝臣曉寫狀

叙爵事

在御狀

正和二

上卿奏覆奏文

名記節申

永陽門院

色

元祐元年七月二日宣旨近江守沙貴社宜奉次正

二位^ニ記和人即高^{ヒサ}原^{ヒラ}隆^{タカ}奉

下卷

左兵衛尉額田^{タケダ}實宣^{ミツマサ}九^ク府事

正和二年二月吉

元祐元年八月廿八日左史生大江穀重^{タケシ}五^ゴ生紀宗

正和三年四月廿八日宣旨正六位上行方^{カタ}の府生大江穀^{タケシ}重^{タケシ}五^ゴ生紀宗

密奏事

吉野佛事書案
古今よりこひのひへ聖君乃せばおさん賢臣の
くふをもぬまくれをえらひよかしのとすて
民をやさしくしてそしとめくもすりほく
つれむすり志をもい詔佛せりり出神に
乃ひり是成やうけふと誓れ本誓をとねり
もぬもぬ不この一事も終をもや我朝も
承もるがる在りこよしとく上とく
以て神代のまことより人ハ九十余年
乃今ふもぬて妙道ハのものほく教万載

をへあつものにあらはれりとし、某流
の年、運金城を奪ひもひが、これはを之
て将来とはうらゆ、又治已來承々以後武
家兵糧絶らずせしむれゆ歴々すゝまくに
於胡乃の義兵をあくして乱世伐志流兵
敵感のゆより於特他アヒトノニ生
三代のう全上絶いだせす勢に徳國比豈因
をうき給く胡家を守護トヤシロ己守す
君乃侍ゆるさきにあらかど下歎止と
以て歎くのうにあらじうる兵糧絶と取能多

さおふるや子孫をやくび絶ト江京縛瓦方帝
にて其政ノキトテ遠失をうと一城うちも色
しども天理よからぬ事ハレ、承久乃事
出来一の志のれを詔とく泰時起居官行乞
現世安民の志あつて其れをうとく狹門毛
納文一佛施も感激ト子孫有余奉れ運命
大難もて可ひ犯也とくをあらそくし
く成つたえ胡運教ト一寢ト御感をあ
てて下一統せられ能空れいたと云ふとてあ
れまつていふ一久、嘗てとすとくことくす

建武乃終東將軍は時をもよおして沛太守像
功勞成されし実力運也隨て胡恃に數を
うよりかども後軍勢れきくへふるゝ急
みて下れりとあやそれ先胡に總全を教へて
せ代むかあくゆひーそれ亂を興す完備
已來の多く是れそろすれども、かくとて
所にて令猶おどりがくとくすやうしく
ろぐらいじんや、領を失し祀す廟もく
其恨岸く、よしめさんあくひ三度代あまえ
御殿をうやぬすも民とやむする所をく

ひは納まし給ひんやうりをかく、せれりと
みるに、ほくは已往おそむけ、父子兄弟歎とま
王室先代未ゆる事にあくひや、寔小典、嚴能
下やう引らるありとく、河内東條のまとて
けく、猶よ先祖改めし勅命に應しやさう、(未
既)也あと不義なうきの来の薄荷会とあくへ
きにあくも、(未)之繪方城下さきとく其後又月日を
送り、(未)あくまほもてまつ和州の付石川(未)
福くもじしあれ向若、(未)うとうとくやすとく
重みをう中連みておぬへや紫瓦を、(未)

きものをやうすらねは後の所に差ありて
三箇條乃篇目或りて其内武家管領乃事
有りあれば、もとより先心を以てたれらを
むかへずもかゝらず天下は西へよきと
みよめき、宗祖率て沛和談あるべく方
ヤシまゝうどひゆうて待許容す。今ほ万円
此邦あつにまじて御方を參せらるべくとく
ミ成る爲因也とを仰らしけるを以て誠了
其謂ありと、急く勅免れ給ふて残給一そ
十二月十三日件給ふと下さる。因十七日達文と

氣てまいらる狀共、本すよとれ清合所乃候
へきどもいづれに観應の号と也有らこめ
らきも諸國乃ち護地役を補役せらるる
もてしくハ一向矯飭乃事うぞ説人乞と思
是且ハは方之處の況々く風也ノアホとく、半
多矣、庚辰合狀すあらん山院城をつめんとの
謀らんとよそやくして、先て静謐の期あるべく
也考ふ所方をれ掌をくそそそん事。ひと
うき走れとぞゆゑて、所をあらす

なよれ在ぢやいもんやせをひ乃礼すうとて諸
人乃りても万民の無事來よハ信堵モ歴
志より何日う民乃うこ代やす免役へ一
乃思あら(元這会祐の事と申出さきすくえ時
とうもあら事監をれ法あらす組後軍
勢めおおとし風吹乃說あら公家一統の傳世
ヨウラ、族人の本領を失へトか色等汚方乃
恩壹ふおもかにほん面く手紙びれくを
アヒキ事き、めて經高也ゆく、会祐ヤさも
會天下外軍勢たうへ本領すおちをきる

ハミ又功すうとてヤおあらと毛自方他才あ哉
乃思あくん毛合浦なう(ト)うるとあきへ、
毛毛毛天下城區(中)毛色人氏をやきく
せく毛毛事、今度乃達要毛う(に)毛やス
ミ武君、人皇正統とくて永樂とがきとけ
あと准ク楚(ト)、況元弘建武乃天下ハ族人の
天下也やあとあらくゆりて十毛毛先皇毛
西毛とぬく(の)う、毛盡戎毛すめやう毛
其上毛諸國毛清毛免毛う(に)毛はくもあとあり、

本朝中興乃時の事理世あ民の道よりへ正義
名経後代よりくらう南時の押賣のみつゝも
むろすむ庶民あるべく者也いふをか遠慮とね
せくまぢう(まや)

錦小路殿より序臣事

霸老乃正業戎使武將の皇家と護事和漢麥
仕通元や純中建久在幕下詔書のれ、補使
とてお家を中興ひきよしとこそ来る
の興廢を下れあ危武力と繫ともとくもとく
承々の不礼よりて我時故下皇祐戎行や

後、方國乃柄あうれう御家の當主極みぬる
れえ弘年中には孫運叡を、半里先皇の聖
運もくもく(時將軍様ふみて戰功と至せく也
の天下響れほとくも應じて教鄙不日に靜
謐あ又建武の詔方れ時純反逆乃時乃軍射
門ゆく發向て誅戮蹕を免くらさす度の
大熱今古比數か一孔と失皇信をふみ瓊口
よすもえ敵意いざる黒雲みゆく仍賊唇と追の
あめんふ義兵を起さうともふ敵意あはば
と青顛貞の在る事大變ふ及紀聞戰力窮

て和平北義をもてひつより還幸脱脛の條有
て三範乃御宗と渡ヤされ皇子御立坊あり
シハ武家舊規すゆゑとして公家を被仇トアリ、
時潛す吉野に御幸乃上、力をもて次守也今度の
義兵ハ黒代家ノ御達成残謀四尋シテ元ノ内
背陶を散シ殊ヨハ御道佛送と経隆ト方
民乃塗ち炭を赦ムキシテようて御会社の
事、度々御向元あ利其篇目あれれ元中
ニ吉聖く近方ニ称シ近モニ御臺子御社佛
当銭を擇シテ領家他領職と論セテ也御捕を
致シ根子管領となシ則血代以て血と対
也是族民乃仁改シルヒヤ其上徳山系由
ヘ領地のゆゑ御教書ホ世寫流布有るシ、
和親の文書にありシ約盟也信をも謂ヘ
若又侍臣乃中少佐せハモ仁を流得モ
シヘモ也將此所事書乃古とくハ天下一統の元
色毛毛終ハ先胡乃御達成モリ、壯三年と誠
又え弘の如く公家の被宦とあり、卿也雲密の
家也僕従も事残、歟あやそや能く

此不第有記紀而論天下北大夫之師度者以
八禽如武家所討中也之小紀之遂入
始焉之先皇之傳絕嗣乃絕也安一之能
玄廟子傳一免給之祀考乎

宋六年四月廿九日辛未五鼓既雞竟尚酉十二
燭終以雞竟次以津三日首都天五十年六月廿日也
十五百金燭燭共三日軒北牆盡八五章大半
燭共三日軒北牆盡八五章大半

沙翁潤然長狀

謹而言上仕作

御老事珍重幸甚下納示抑此一家中重用依
意外遂朝代之訖證文本か今之故以是是
極攻才以賴與疫之累以至老患老之事此
前二三代大小口付以耕數年或七八而文書本孔
林作壁文古老之而物況本承空以後枯毫以
了於無事之由疏事以汝老耄作之空忘懷之而
申事而辭辭以汝老耄作之空忘懷之而
作之而猶恐以之僥服見耳空而彰丸紛之

古事記大概書付中計

一當家根元之車至永武地神五代之歎祚秘在池
庄以北迄天津兜扈根号代之人之代猶未改
藤氏之坐未移武家号相良漫史乙度去遠引
相良之庄清便宅以弘此也之次方方移之北京
蜀可更居度以之間不及巨细以至瓦

一長賴公移而未佈下向以身忠貞之次身承傳
分於坂東二保門合戰乞捕焉名既向額 痘以
壬時往以御甲相添所獲不矣向織室底鮮見
以殘以島山庄有次而退伐之時以數掌之示急

竹你入以之隙味旁鑿之胸毛隨毛以即時引切
敵跋含組為丸符以袖針以之數勢之中入之
出以之隙求良袖切之而毛時迷毛參毛該盡毛
比數作部毛後日不之諾侍毛碎毛以宇治河
渡之時榜丈河張大錦降功戰以竟竟之名馬
赤波躍切捨毛毛並通毛捕高名以毛時毛待
常流亨治河錦切毛毛既以毛今茂木跡以
一處毛忠貞形毛故以毛御本固毛利毛此領毛
之事者毛中車作毛橋廢毛志變广郡毛
前國素毛恒毛毛毛此核復以於毛中治

能知る者未建久九年勅守總領中下向之時
比舍才宗初相平生之時因乃以紅色毛而
御身志尚郡に滞通以来閑东臣度之時先日向
毛匹素約之弓以欣隆然伊东處守下向是又
眼ふお御一つ毛御兄弟之流空行後之過也
力口向國之督肥前國守護職之子元亮行之
の侍従文政自以ア

一長頬侍端子松親近尚郡左邊食之时时
御將軍居宮八幡に侍従諸公を仰此前打心於
馬上立楊希代と面因乞蒙詔侍之選不致逾

佐奉公下國之時若世上之物於存余之内乞之
可付某之使至念之次才之乞也子孫末年雅諭
雖斜敵以內舍才之男頬後江御前以讓乞所居居
作立子者小名字號号永留于所成功遂名身
退是天道也死相守及平文以之亦乞其號號

一親仙ら山居所之事先代母御深山山居
之後又求麻山之號號以居之以速之御事忙山居
事作名号於一途面白更衣了之既と云雜忙能
を除ば與之一乞之號八代以代

一長頬侍親父頬宗之事志依謄罷長頬以下

向之四年之前為幼食未齒那為良藥之村社
完好下著以後志士於二男賴氏侍奉子以隆
眼氣以紅棕公儀以一名之內別色紅用來以
通中鴻以

一永富二代目賴常為齒家三代以互繩食村死以
左格之忠節之筋因民相交又以定之賴時代日列
於城之事治家郊以御下知知以邑民傳鑑文
愼也以家事未葉田中公長為仁術立持至以
之憂三ヶ國大亂之刻お役在亦始前賴此鑑
守二三人四方充數掌越後之守城役焉以

一產列山門之事鳴津方祖子熱領之立于國元
之降難儀弘極以久之久建山門城者皆
津總列衣櫛皆以之青徑鳴津方齒家以收城
之久内於城之督之退治被護可同也之由於
聖之宗端勢出強之乞產列衣同家紅付件以
法齒家志不立之弓箭以之弓热附以多而
片守復衣支見作之宗衣但全省以城志云六
代古之相渡以之一家村山傳亦可為仁術立持
至以既廿七年維格護以一家以迄亂竟賴沒產
齋成行年矣矣

牛原院之事長後御代是歲三月禊賀之時
 以氣流為津方以方以氣去以守則以知以
 為仁術左宗室長並移居至左以向菊池為鄰
 根為方右以菊池為朱之風薰少之取鷺以知
 蓬摩矣其廻武略以柔水保之而歌現歌以當
 殿裏之音多之入乎之間方之同前亂以氣柔
 先以只做牛原院之子安雄席兕鳴戶匠進以
 一重山牛山知行之事之國又相故歌曰鳴津度
 刑部卿心有腐席兒鳴玉礼矣か一味
 陰為形口為績多年古智高此是是歲正月以

涉因之文明八年四月牛原院之社取祭數日
 故相體以之間同九月收城底去以今內為國久
 季久立作坐於平地山門之旁遂成以之
 口完惟以之為之由作之祭往經省以知乃
 仁術或於大胸賴猶立持毫毛也宗室根讓
 一為縫八代競高之根元者伯利通外之為叔
 作於忠末幸松處以之入之內河式於少捕
 俗仕始方へ山中以之以來長後御左世以以彼
 弗就乞毛八代仕始作為之芳也高畠卿之
 予就本去以之宋改城根讓以時為績息女答

綠之微惠全以既以重使就俄之酒者。近者作
流是歲上不若拘亦彌也。第結以家牛屎
流互斗之折節至高。因卿之私急以達。然蓋小
人救則弛緩堅固。拘堪以之。而子及力。備陣
作不思後之後。乞以報。及彼恨恨。深主為後年
山互陣。皇年而主八代。以數向極。計古仕
成以後史。嗣祚。以分枝。文。以十五年。和。城。方
角。抑。豪。立。付。陣。以。能。者。自。合。力。濟。津。固。久。名。
代。舍。矛。彈。西。忠。敵。同。逃。作。是。氏。而。名。代。濟。就。就
曰。取。之。人。教。邪。考。院。室。度。自。舟。北。不。昌。宅。莫。

前道秀何成為後以不當因卿宿陣以送天子
志父上津浦極平衣邑成幕入臺庫以汝代陞
長治以法守護未持許久時以疾惟忠依合緣
主後仰門一味重復不以私於山內^お運人數八町
既上之無以少油乃以之爲也未聞言也少也か
く越度以左之爲殘臺^レ亂依難納免以立開
沖以高田立新^レ聖三年之春又內勢仕為後佐安
生之新下以之文伯門主也勝力以之稱勢是
約付三月^レ主役落以別時為後入都^レ既十六年
至元以^レ主國事歸也知行^レ暨元^レ因以^レ疾惟忠

於固恩於小然後及於亂矣今後
仰智者以才以多力者一家爲亂之宗後
復之惟亮也仰合力仰惟忠惟孝此相得之江
往逝去之刻以之可徑八代不惟系以互力仰既
重胡流佈發足之降為勢出張之家也馬門原
以方兵逼合戰字達之而數十人討捕以依
全城瓦京毫限丁上緣外有時之於於確孰
國家之之無空以中率對焉有計末广八代
數臣降私其緣以其比之字去廢葡萄池焉充
復競至之弓等亦辰之年赤然之伏

壬午以八代玄退松陵之二年也甚之以故清方以
前還附之後殊又以廉方不知仍之不地示之
近臣固若之和勦者每事以之多分之永代
俄絕之旨立仰切乎李商國祖成諱溫光性以
為續如室成統以之皆同如平成行以之及清
能以永國寺四代晉山東臺核未六月張了之虎
余於高八代豐福安塔之重胡杭石空之
其後能連持未家菊處以之序之時長每嫡
女之名號之從之你急以表了紀伊少胡度的清

文忠公持酒肴下至山中之時後既醉亦忘其固
坐之通上下申宿之處主胡核舟船逝去之番
夷了相破內因弓箭山井水小家合中患疫土以
如比之割裂^之_之肉以為續到彼庄子使之由
之作人亦广般老者為之節以之土里^之也
惟曹子植江一陣亡後會此年祖向可就遊此
矣之事如向之由淮沂人也而承引現能以陰
史不守護石一臂之相隔以能運於至術成人
伟威勢之時^之也後南充以之一味之氣也
猶如雲霞氣象無以之處之色合戰守護充也

分行私物者陸競以爲勢以付符陣安遠以相勸
殊由向陣竹條向上穿之尾毛每以之為綻以活壞
之參求广薦小兒代充人衣討死以依之後八
代民沒唐以既薦小兒日久見之乞苦於天子等
回敵多中事作私以結勾訛和賈歲暮候況私以
美幸哉故^之恐行以之方之以之悔先取之薦以
以空固之竟於南還之國長每以下知牛屎院武
鳴津方江紀去渡以左以之處為續以寢九年^未
二月北退八代聖^之子六月^也逝去之際宴之^之食食
諸道所以雖絕長每不圖晝夜策^之過惟張之東

時分於張公篇目出來既能運括辭之年青上旬
以為來因退之由多少而則移之相因以考後以
余傳悅志以御平素之儀傳作物之由立序布以
向後是所以示為後一代不忠之俗未及經幅
於長每可立傳用之而以相達以方之予八代豐獨
之事名之曰事以委外之故或以判其後者清
書考據之源宜以某志同七月永麻山越葛小丘之
本哉後之才八代之亂以六卿憲仕拂允充達
先君之素志如高因引退以古城之結構以軍紀
能為復舊以固成年八月又以代之押渡至大因濟

松尾守着陣アシタカから後方角アシタカ度アシタカ以アシタカ前合力以アシタカ離アシタカソ内
中阿難色アシタカ仕合更以大第アシタカ之由相守以敵城アシタカ
祚アシタカ度アシタカ丁通行アシタカ之抗アシタカ度アシタカ不見以アシタカ之同十月以
開陣アシタカ因城利築アシタカ外勿偏アシタカ信アシタカ才アシタカ武略山林
文アシタカ頃惟長アシタカ別アシタカ然全以天草アシタカ揆中アシタカ度アシタカ是
多入アシタカ作アシタカ入眼アシタカ划聖年文龜三年アシタカ八月
又八代持渡アシタカ先获原アシタカ付陣アシタカ因窮月城方角近
陣アシタカ九伐以アシタカ陣中之間能運核瓶アシタカ御入於以一言
為守護為光沉息重克嫡男志滿後アシタカ此度アシタカ也
豈三人アシタカ停生害アシタカ而國家建能運抗辱アシタカ也

成行ト松間力清合力鳴一揆中皆因立候付レ
条八仁毛自仰素陣レ上村あ守山坂西中一
勢立持モ小め腹惟長父子於小河左陳以惟宗
舍守竹原處人并諸勢力難(素陣レ少)方と
追詰陣以敵城れ隠(之)降従張教御丈正勸
吉塔守東松井下向(之)敵城口立作縛(之)守
絆衣(往)上意引忠父子碑二月七日誅(之)則時長
毎立城以要(之)縛(之)或同(之)知行(之)然々不經時
日必張於江段系上役乞邑汚孔於你(至)可(之)考
定(之)既(之)廻同三月急反(之)切(之)索城(之)參

ノノノノ押然後以政隆板收相續之俄立你(至)其
國中板(之)亂(之)宇大(之)城右京免(之)人并達(之)
石至(之)是(之)役(之)立(之)除(之)腰(之)立(之)振(之)
木替(之)板(之)統(之)一(之)年(之)中(之)伯(之)宇大(之)立(之)
然(之)豐(之)福(之)格(之)復(之)木(之)依(之)難(之)事(之)成(之)立(之)持(之)根(之)之
四立(之)年(之)志(之)荒(之)經(之)未(之)辯(之)卯(之)月(之)高(之)代(之)衣(之)防(之)場(之)折(之)
亨(之)去(之)元(之)陶(之)久(之)河(之)之合(之)五(之)元(之)外(之)長(之)敷(之)矢(之)軍
安(之)勿(之)紓(之)老(之)者(之)難(之)意(之)見(之)不(之)紓(之)相(之)用(之)方(之)向
敵(之)方(之)志(之)近(之)之(之)衆(之)信(之)人(之)元(之)重(之)麓(之)志(之)社(之)志(之)
向(之)一(之)人(之)茂(之)不(之)候(之)後(之)路(之)名(之)旅(之)者(之)寒(之)社(之)説(之)底(之)

及善引退之處敵遠之付送之間依一日之方宗
往之私老矣七十餘歲度以於志八代則時成難儀
皆相驅車以風之發如雲之亂也皆人心曉闇
成以刻長每弛塞冥城上下加下知級而家之人
故一時因公往來來往一足或之引退之易禁宮
以承於胸臆之未免先可防事物之由化相觸高
考撫亦彷彿不勢微鬼神哉計以法之也多故
際內外色之居不面之抑禮以使之內尚外之故
皆同努力則成白日以名主一人不曉主所望之
又丸滿以之為尚忍充大校左右亦皆之也承广

而以家總翌日早之公代之才越以以才之而子
萬小之入乃次晝夜弛續以之間敵是強也文
原而之雖來以為勢之仲見以武則敗少惟危
殆後服之而以之隙場目深之裏里不相納以爲
糧心抗之卒相忘也以臣弟之衝繆方角以武照
兵對多以之佐僕者受一事以之多良多哉其猶酒
肴或種之疏衣故之純^{アシ}三用若夫ハ衣水以御之而
之經也文王之云頑濟國神方勞與之仰懸之時也
民之多言如彼之多也只石之之行不外之既不有也
波風也納海之不立如理也換民之以成敗長此傳

連獲以勗、社号休也。乙亥年今和泉氏以役居山城
郭招護之僚才一實二番糧之毒岸与上古事
傳以武多时八代社踏殊于今若安此_承子茂
只侍一人之高卷_相乎又_承殊_相仰事其承
至以八代知_相事_相者純變者_相是_相以若時
東相向_相若長每念_相古智_相課_相予_相入_相亦可
立色_相在_相事_相之_相五_相無_相之_相由_相分_相於_相令_相乃_相
間_相更_相元_相任_相不_相背_相拂_相存_相誠_相不_相恩_相儀_相通_相友_相
你_相少_相以_相身_相然_相別_相人_相民_相勞_相石_相心_相尤_相五_相難_相御_相操
以_相往_相爭_相返_相也_相不_相可_相互_相忘_相却_相以_相積薪_相放_相火_相

古_相不_相外_相不_相也

一、_相豐福_相辛卯月_相越_相之_相事_相厥_相一_相結名_相豐州_相社号
濟味_相方_相以_相平_相後_相賜_相伯_相則_相社政_相役_相要害_相而_相年_相於_相
格_相護_相以_相多_相長_相以_相方_相故_相日_相付_相陣_相以_相蓮_相松_相陰_相停
居_相居_相以_相長_相紙_相古_相年_相之_相宗_相玉_相寺_相以_相高_相升_相古_相山
之_相多_相泛_相豐_相而_相吉_相光_相寺_相下_相向_相化_相以_相前_相之_相達_相恩_相會_相
乞_相絕_相中_相席_相子_相木_相親_相自_相因_相爲_相重_相質_相以_相固_相道_相守_相山_相
去_相越_相齊_相下_相族_相以_相字_相古_相也_相此_相僅_相但_相以_相孝_相子_相而_相核_相月
猶_相而_相底_相城_相以_相伯_相者_相長_相照_相內_相之_相底_相至_相之_相古_相道_相之_相古_相也_相
左_相付_相以_相尚_相前_相之_相傳_相多_相不_相稿_相時_相日_相如_相行_相和平_相

考於久之未見氣會於時古今恨之一事餘
一為後八代以智行而為後也博以尚忍可五傳越
^山山之前鑿開赤广山之路而改觀仙跡而之當
江坂依屈屋門下之以傍る草豐西椅可以取代
は所池浦鹿江と之相移以北越之守佐唐家虎首
作長觀仙公亦有十一代ゆく除却極少也

うの鷦子代すあら門十代もつ小めふ我をかく
又其夜清々

一任すあらかとせ萬やまゆらせきのとくもえに達
ば音御馬小併八代智行之事之賴親以佈曠

絶縁りと因氣作いむと勝りハ

一此前勒者之竹子八代志赤麻山之櫟り故大仰お
八代志号れノ門より行車底注古競切リムキ
年と采と赤麻之土地水にく運ひと事不可と
走と限作さるハ代之事終みハ赤子にて内格
獲と由清主ひ手を微ぬとくに破敗見大井
之件承宅り哉

一豊州之事代之行合以前為後八代之元向
付か候玉枝山虎海と色立候を以系既並野越
登尾山虎海は立木枝互不在紅毛陣より

猛威力の様の事急度以方後攻麻以之を
後長毎發向之時或於以可收合力之氣之所
以氣又以前之立前仁左陳小隊入子細久者勢勢
如八代雖往打越之軍也此左右三面乞
乞お氣以弓代方陣中之間不絕之氣相支以依
此伐の顏色之仕合義安之氣十修本度之御
芳匂之过也代之也傳之你室之多你候之子
可見也

一家續時代故將津忠國伊東祐亮仁義九氣以
既山東向南城津原志之都、那斗北野抱
依吉注毛卒諸勢以百勝以日列津原志之都、忠國全
陣而木鞋足底作足作足足、有士領事者必守力後圍
地盤之間矣元氣吹而以小氣之氣之強弱以被
但意見以和合間陣以柔則伸東殿之軍運以示
續也簾中老患幽以殊以是故之氣以一體
之筋目代之力無之过號以相計以是也老志
抱死而至作

一氏年月從守護之所才免、也少更相督幕
了之抗守之由亂及以安之元以重胡抗能運於
拂高代之事多送竟中以氏方一家尊代之年來

其後は書く時外此感動多也以子今相残り
之索適當時義統於八代に至猶仰館はる故
に老志ノ被見可也庶幾乎する事

一前代老臣北方守護を乞上も書札底裏付乞
蓬船時代始し侍え服とも多代子細以ひて
多考不察にて以之間誰も底存知之前に弘一家
未通之時以次と筋目ヒハト申長續、夙主
此平主小為續志三男ゆく以度ト前有聖名伏
淪以世ノ義不独以之承別々守護にて致慶
序父子才烈以張ア以登乃郡航立号鳥帽子

以之榮裏付從至附子細以統中城萬才表御
忠臣石裏付之事是志也為續一途五萬室之
旨也乞由、乞作文以之必追就
愈内公作文以之追就復之乞持許以除傷之舊
左家より出仕所は爰元於入服不如何母と付
書札裏付事立候役之乞持許以之前代れ
遠いと往來以至外國中方と云裏付と長
毎歲乞多めりと支拂運輸事僅已故去國家之
朴朴にゆき藤色之立拂衣之以前之傳以我之
八代之納班事从之番函中者者之降也

狀より誠謹アモリ口脂之色肉之姿傳以時代不同儀以先八代取て納れ事半功倍矣可
能私利为先惜老者中へ裏付て目も皮肉因
重國矣見以政事之事列々起向能無會心乎
再之之後之任政儀式

一代之元服多領官之事空服石角小冠之
儀ル此文行之事者既無教に宣所安書傳肉
書亦既載作數通相承御文書以既一家二者
も多此教書小成以於今度お跡以心追
年忘依稿晉書れり孔経交成御余見

乃蟄居之身然耳

一政隆極一前ニ見古近蜀以八代モ先儀以
如範例後渡海已後お國中識る以次方休歎同
惟前河内一年由度以至後尚の頃惟豐
玄退矣アシ方而ゆき風序あひて後猶善寺江
市端又以何医商方以調治兩難以是く次第
者狂近事レムる巨細不ア及レ

一蓮舟船過ノ右は折檻之附木立江之世主
志大小依手固恩久ち未いそ難以幸運ひ金錢
むくゆく飛勾徳是又面白也其以君子莫求

若安と作ら思念之ゆき以候舍館近いも瀬
瀬より或拂湯治之時志必考考一處人此因爲
作る名車も失達可致い我身と不^レお附を
之用之ゆり又於御館者少數奇々余無く御本
書本無修復其内少^レ御分或老若依侍用
匂^レ或面^レ衣^レ侍^レ久^レ其仕とりも放闊詭々
久^レ其^レ所^レ妹又お侍簾中方^レ拂^レ惣^レと^レ書
表^レ多^レ青氣色^レ如^レ子晚^レ此^レ封面^レ以^レ君子不^レ猶怨^レと云
一絶前^レ也人^レと^レ上^レ帝^レ音^レ擇^レ下^レ教^レ心^レ多^レと^レ又武
王^レ東^レ同^レ公^レ丹^レ後^レ亂國^レ少^レ事^レ三^レ吐^レ哺^レ握^レ餐^レ少^レ丸

是^レ我^レ也^レ人^レと^レ同^レ言^レ不^レ哉^レ故^レ是^レ奉^レ文^レ未^レ々^レ立^レ拂^レ左^レ胸
中^レ以^レ能^レ於^レ以^レ拂^レ擇^レ之^レ与^レ作^レ欲^レ視^レ其^レ君^レ視^レ臣^レ色^レ以^レ之^レ
之^レ索^レ不^レ以^レ之^レ仕^レ人^レ未^レ^タ別^レ其^レ御^レ令^レ之^レ振^レ乘^レ之^レ取^レ出^レ
嗜^レ好^レ弱^レ強^レ以^レ停^レ坐^レ近^レ畫^レ衣^レ余^レ會^レ之^レ雜^レ談^レ殊^レ多^レ
母^レ之^レ子^レ綱^レと^レ厭^レ子^レ事^レ終^レ必^レ無^レ子^レ成^レ約^レ以^レ名^レ無^レ
而^レ於^レ色^レ每^レ度^レ氣^レ你^レ以^レ是^レ入^レ村^レ據^レ之^レ言^レ漏^レ安^レ拓^レ鷗
媒^レ車^レ不^レ該^レ私^レ破^レ道^レ也^レ以^レ相^レ商^レ故^レ奉^レ送^レ也^レ

下署

天文書

十月廿二日

檢前新兵房尉敍

修理道

仰承固然

群書類從卷第三百六十九

合戰部一

將門記

此後貞誠三顧已身立身修德莫過於忠行損石失利無甚於邪惡清廉之比宿於炮室遭奎之名取於同烈然本文云不憂前生貪報但吟惡名之後流者遂巡懲惡之地必可有不善之名不如簞門以遂名上花城以達身加之一生只如隙千歲誰禁猶革直生可辭盜跡苟貞誠奉身於公章預於司馬烈況積勞於朝家茲可拜朱紫之衣其次狀奏身愁等畢以承平八年春二月

中旬自山道烹上將門具聞此言告伴類云讒人之行
擅忠人之在己上邪惡之心媢富貴之先我身所謂諫
施欲戒秋風敗之貿人欲明讒人憲之今伴貞盛將門
會稽未遂欲報難忘若上官都讒將門歟不如追停貞
盛躁彌之害率百餘騎之兵火急追征以二月廿九日
追著於信濃國少縣郡國分寺之邊便帶千何川彼此
合戰之間無有勝負厥內彼方上兵他因真樹中矢而
死此方上兵文室好立中矢生也自幸有天命凡昌布
之鎬遁隱山中將門千般搔首空還堵色以去承平
八月春二月中武藏守興世王公漁絳基久足立郡司

判官代武藏武芝共各爭不治之由云

陸與詔記

朝議鑄紅之間賴義朝臣願求兵於光賴并食弟武賴
等於是武則以同年秋七月率子弟万余人兵越乘於
達與國將軍大喜率三千餘人以七月二十六日發國
八月九日到栗原郡營昔因村將軍征暇走之
号曰撫摩亦猶存也武則真人先軍此處邂逅相遇丘陵心懷若
其拭淚悲喜交至同十六日定諸東押領使清恩武自
為一陣武則橋自賴為二陣則走万吉彦秀武為
三陣武則鄂亦聲也橋賴自為四陣自賴承也字賴義

朝臣為五陣五陣中亦分三陣人一陣將軍一陣副將軍一陣
喜美侯武忠為六陣字班司讀直兵廻為七陣字彌江
之主小松柵五町餘餘也件柵者是宗任叔父僧良
照柵也之件柵東南帶深疏之碧潭西北負壁立之
青巖步騎其後然而兵士深狂是則大伴百季等引卒敢
死者二十餘人以劍鑿岸杖鉸登巖斬壞柵下亂入
城內合力攻擊城中擾亂賊衆潰敗宗佐將八百餘騎
城外挑戰前陣頗疲不能敗之因茲乃五陣軍士平貞
平管原行基源真清刑部千富大原信助清原真廉藤
厚惠成橋孝忠源親季藤厚朝臣時經丸子宿祢弘政

藤厚光貞佐伯元方平經貞絶季武安信師方等合加
攻之皆是將軍麾下坂東精兵也入万死忘一生虛歟
宗佐軍云々

采入軍物語

氏人うふゆハシモモモモウスハ
あり^秋四^日ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ひん代うらうりゆうさくうさくうさくうさくう
きもんとくとくとくとくとくとくとくとくとく
かへううう後方さゑわんを山野さゑもんゆめまろ
ういふきちくうのを回りあくこのたうたう

ウサイ西のやうをあめ角みれ田と白野相
のまう父し三田こく分まう大のく次うお鳥扇佐舞佐
小こう父のまう田セ都まう向ハ節押加め大ち人た
節にテのひうあまちのまう山め日め大ち人た
女をうをや川平三うとうをう鶴鶴き名む元二ひの
ま保、ぬウミのくタ、ハるんまちあやを、のまり
田川むうい田太り田、肥つちやいはのくふう
い伊藤飯さゑすんのセううさみ石ふをあ田一
あらうれくな、ハおきづえむんうんけうそう
や屋氣井、井高高くマううくシ、高くマうシ、高くマうシ

十萬ト紀ヨの田りくうせうたうのよしや
うくんうハ氣けのおゆかしハ人をうき原原うく
あしと人て城山きあもんの尉、新はの小をういま
ひアのせうへきようせいわたんまきませせ
名のからかくくくくうの大トやう可ハ名ままの
セうも時、かくくくく、名もいうは、木の
太木、信ふきまいううれせいは方トうれいマてせめぞ

今る

六月五日のくれき、いま山山をめせいううれども
大木の山とうつきにくり先を行なのあくまし

ハ人をうき、奈トトれやこセヘ、シと山さるもん
のやうめの少太印のまのひふの内人内人の
冬印あり、りめたゞす井の三郡郡名印あさや太
小えオニテ、このミヤタゞしる次、すれや子ミス
古く井の波御波御のほ波波や、か波波三、あき三、
ありうおで、御れや、す四人四人、御せ、御せ、御せ、御せ、
そドアセ、お中、うまの、うら見、うの、や三、も、ちの、や
四節、内三、御、御、波の、三、下、卷原、大御、大、内、川、三、郡、ヒヤ
ま、の、冬、印、ち、ら、れ、、お、御、く、う、田、き、や、う、ぬ、の、や、う、大
ウ、き、ふ、御、ア、ン、の、大、御、つ、の、尉、これ、と、は、し、め、そ、く、て

吾方よ記、め乃、も、さには、と、そ、う、そ、う
む、う、み、の、き、一、そ、り、く、う、う、れ、そ、の、よ、う、云、う、日
毛、の、る、う、の、ほ、く、う、む、し、ヤ、く、う、の、矢、か、い、め、う、
う、う、の、ち、も、ち、そ、う、う、あ、の、も、く、の、下、せ、こ、ん、う、う
下、て、こ、れ、(こ、こ、ろ、ハ、な、ふ、モ、の、モ、う、ヤ、ハ、な、か、の、
ふ、の、信、人、大、事、た、う、う、す、ミ、な、り、と、聲、石、お、う、に、
二、人の、し、レ、ヤ、これ、と、ミ、是、ハ、な、け、田、サ、エ、印、る、め
て、れ、も、も、ち、れ、の、く、に、の、信、人、大、事、六、下、内、上、た
近、この、川、内、セ、み、ま、う、あ、り、と、お、せ、り、れ、ハ、う、す
え、三、手、せ、し、や、ハ、め、き、し、う、一、も、ん、か、れ、ハ、え、え、大、

御玉持アタマノ内と及ふれぬじハ中うけぬハ
うんとてよつ引て丁この内に色ういき合とのふ
うふのきもそはつきまにむちとあられなにす
理ウトこれたもれくヒルヤクセトヒトモくわ
れぬハラヌキモ手せハモドリ人ひ御玉あしゆう
めあらうあぬくいやうをんとてよつ引て丁といり
六ドウゆんてのきうほけのうのめううをせ
やうふいさせミ馬シモ妻ニテハタレハうちこら
此も一や六人よ也合つのみ六ドヒうちこりケ
おかては人炊せめこりハツカキサアリまう

まきをふ成そ引もろ乞ときこえんれハ鷹治の
己うりヘむうふそらみせくやいたいたちと切左赤
せん尉くちあ一キララふくそくや十王起うりヨテ
はせきくりせハまうあととい西一くぢうれ
れとも強ふうかくをして引とう多くみせくに
の住人姓屋もちやのくへんしやふかせくにのちう
人のうのこふとくんしわちてうそれふくり
まくまうとくり大行小左郎姓いへあうとてりけか
そりよせうこくりちるのくふの住人のもて三下
ト二人もうふきよてめゆまセモうつうト大行

を此處へもとしのくふせほんくへんりう
先をんの人からまや佑は草めかいきとハツつも
後代の方こられしにきよーくもえへぬふもせら
ふとはちーめられぬこーこめらぬ所すいもてを
をしかうへてく凡ておうやうてわきへてくひとて
るこの大行おなふなよヤハトク、うくくんとうへ
佑のすまよつてあこらうあらんものとあらうせへ
すとのされくらへをう歴年のひるみせうとニ乃人
竹ととくらへこちうくハル代大行をれくれめ
タてまくとくれくらむてお充てあせうと院

のあめんのえよめきれひ家仕ヒハあくとえりう
歴年とえハぢうこのうをあしうもさしめせん
じうにききうアラモトのくのアヤスチアシうちうつゐとめし
て門をつてもういのくしをえをえをえれハ家
うくおなハとくまよひおりかううせこうりもハ
やうくあるのこりてへハかくくんせ、どもこれと
き、いざきうあひめとむきんこれのへて紀ふを
つばくんとわくともうくふれくせ、いきめくふ
鳥アラモトのきのきうゑく
山ふ御兵衛のう紀アラモトのくく兵赤入戻あみの

きやうふのセラウム^良良^新兵^新
兵^新山^新山^日里^目めくろめをふさ^{佐賀羅}の三^トウカ^地の氣^田
内^田中^田に^田、これ^トをけしめくして一^トト^トタキ^タめ
うつてロ^トキ^トと^トけ^トす、みわ^トと^トみ^トのせ
く^トうじ^ツう^ト田^トとい^ト所^ト見^トま^トせ^トい^トう^トう^ト
付^ハり

くいせ川^ハの内^川は、うれ十^トキ^トモ^トへ^ト、
うせく^トれとまう^トき^トこ^トうれく^トせつ^トを
う^トあみ^トさ^トも^トん^トにか^ト記^トと^トめと^トり^トけ^ト
け^トそ^トり^トひ^トい^トひ^トへ^トま^ト、^トこ^トれ^ト山^ト田^トを

け^トく^トか^トと^トう^トき^トハ^トよ^トじ^トう^ト、^ト記^トと^トえ^トん^トを
う^トや^トハ^トあ^トす^トう^トの住^ト人^トと^トし^トぬ^トの^トき^トち^トさ^トを^トそ^ト
ま^トて^トえ^ト金^トた^トら^ト不^ト可^トと^トこ^トを^トあ^トき^トえ^トく^トに^トこ^トと^トしま^ト
ら^ト田^トの^ト次^ト下^トう^ト市^ト皆^トみ^トハ^ト水^ト野^トお^ト近^ト大^ト金^トた^トを^ト金^トめ
を^ト兵^トへ^トと^ト麻^トう^ト兵^トあ^トい^トよ^トも^トう^トあ^トき^トこ^トん^ト兵^ト詔^ト切^ト
れ^トと^ト口^トし^トめ^トと^トし^トれ^トナ^トお^トれ^トの^ト兵^ト河^トの^トき^トを^トそ^ト
り^ト、^トく^トさん^トく^トよ^ト、^トく^トふ^トあ^トい^トハ^トリ^トよ^トい^トか^ト
く^トさ^トき^トう^トき^トの^トあ^トつ^トね^トあ^トつ^トお^トめ^ト、^ト車^トう^トこ^トう^ト
か^トち^トの^トく^ト内^トと^ト石^トめ^トつ^トく^トこ^トく^トし^トる^トう^トか^トく^トれ^トの^トど^ト
や^トく^トく^トも^トま^ト、^トこ^トよ^トろ^トも^ト、^トこ^トう^トあ^トり^トこ^トい^トす^トう^ト

もうちうあくへこもうやうみえへうらうぬ
ハ後うちちるにれうてえかうみうちヌ波うぬ
うでもわくへうらうぬうのめまうとい
せそ引志りえくへ入は^根の野、女神ハヤー邑もな
れ矣すしまつうういきせそ引志りえく大ぬ軍
もがのうみハ河のをくらうとくいくき
くらゆれきこれとくくん鳥とてれのり
やむいこますめうこゑくとあれきすへてゆく
うくらふこえうんじせいアキーナきつり莫
う田次郎たけしきへそあくういくらうあふら

ちふへえやうあうまれハみしときいとめりる
うちのちめくみびへま兵衛尉きりへ
さくねう、とあやとめ岡ユドアム山とくいふ山あ
ゆふもとくうきう志らとて二の三ちあうこせ
原ヨ京ウ^ナすりくんもとむけくきこりとあと
山とハア^ナあせうすもととモヤ^シ記^シへせん
はくゆうこすきふてうこ次^シり志^シハラタヤ
ざきさんより久い起^スるもんうのうう一并
上地もこゑやゆめありゆ上いしくうのめぬも
とあいへこうへこうこみかうこえきまのせうま

こもれうみのあらうとうんうれいとものとし
うを時ととつてつくりあれはえやううちうちも
お巻さんくよをうひうちうくそにうんうれいせ
ともてめらひくせめくふはつめりせのあくまく
そちりくよあちきせのゆふねくもうくふんよ
しゆのへくのまやれいわすやまとせんくわ
りきやうふもうくん現観くと君のつびうちねー
てぬふらちころきくらはまのせうはくちとえ
ふともうせせりかくのくよみくきく
うちもくへいくまほは師たかの法や海教きく

鳥
其のあからせ久んとん代うちの久く久
久きうちせほ三さゑ人るをよきよてもうへれり
ふ理ゆふめ左^高みうちせ^信志をく太郎^高おとよ記^高こ
いろせへとしそもうひく
と肯十^高テ^高あきの太^高約^高らうミ^高せう^高時^高房^高せ^高この
もしちらくとしづや^高路^高つちんとそりをまもを
やうとあ無^高とも向^高きそにとくよせ^高それ^高に^高船^高い^高
こ^高々人引^高か^高う^高う^高つ^高と^高し^高うれ^高て^高山^高口^高す^高と^高人^高ぬ
そ^高え山^高津^高く^高え^高と^高そ^高り^高そ^高り^高らうみ^高う^高う^高
其のものせすしみのを^高く^高め^高め^高う^高も^高川^高

や以下ちしつめうとくすやしてあこうひきう
かくれよてけくいしらまされし引轍りそく
う、モタリはニラはのミヤ四脚かりかうかふ
とよもうといタドモおちてのいこよあさ、
うみ矢筋きうちよりをりやあくらにひくま
タタタタえれんがるのヨルモムヨモヒコリ
タタタタ東三木とえんちく先またきとふう
マシとおて志かの、あの傳人とく地の十郎殿
歎きとぞあらしとあらうつみ此の矢とう
ちぬこれあしく十三東ニトセナリタタタ

とのやのう内のミヤ四脚かりありと矢走しも
くるとまうひきて矢といありのゆかして町あ
ありといらうアソ川のもくよ山田の所行しけ、
ウからうなき、せいできのひらしてまうるふす
ろいの袖うううく、けよはもとく金忠實や
ちくやおへそくもとくせくちんむう
てあらりうり
かいのふめ住人正井のた部たうゆゑくつきやう
おちのよきなりゑい
父ま一むくよてハチラウあよハ唐口てや先もう

をちくらうこまきにすせりうちもれか龜ハラキ
へそひくさりあやら地すれ河ふのそんてハモリ
モモヘアヒナアムシハウスルタムロヘビ
トモテクレムクンヘモモソラウトロササギ
ミメセトヨハキナシハモソノタニ田三
山崎紀三郎新波
モモシロサケスルタメモモゼ
本とんりもさーおるつ住人志のやきゑんつ
うちもく六月もんいつもとくよせくみ
えりきらうかまのいタヤシまつりうじゆ

ちめつへうちのけみとれゑハもくくふ
ちをめりこえたりへりくらこれもみまこと
とひきりハちをうすよ引うけてこの見ゆる
ろの次う^宮寺^三すくるむ^便^黒せぞうひこう
少^三うなうくも^一やかた^高うかた^トを^鳥ほたぬえ
たうく^ノね^トあく^トや^トく^トあく^ト小^トふ^ト下^トこれ
あと^トしととしもそくたうりく
り木^ト木^ト木^トをや^トへるを^トけ^トへ^トしや^ト
きもく^トい中^ト山^トあ^トう^トさ^トせ^トく^ト一^トう^トく^トせ^ト
を^トよ^トみ^トみ^トお^トせ^ト升^ト小^ト木^トみ^ト己^トの^トま^ト内^ト

らあいはのそもついてめうとあれども後り
き本よん尋みのうち时いそらひさんのかつる
ハみやまとトシヤドリのねうをうき原四、内
川海ねううの、ぬう四もすかせう御便渡
ら小うあえのと一キ六以上セキつら川く邑
くうり

もさくおくの住人安保あふのまやうぬのせうさ能
えりあ不高のやんふのせういつてのとうこのあ
むらうあをやうもばうひをあくとあきタア
むつハクレハシもいハ食せ一和よ已くき人

河もさのそみくる而コ二人うるしもを因にく
わきんとて後よつきうち、まきを見く
けうるもののもとうるくぬをかへんにや品
いれもさくおうとあへばはうひよ年くをぬ
ハ二人の子もゆゑとくはるうをせんにめ
くやとく、たきにひうり、店もきやつもうる
あ、りくまれわせらううの、ハ志ゆんうきへあ
りてれくまれわせらううの、のちやるいコモ志ゆんうき
を人命にうくらんすにあくしてあるんじん
まうからまやそ二スラうつ毛うもとあく

えつ今泉
とけのうしもとめおれすらへうつ
とくこうくうきうきうきうきうき
うものあくうトハ有よれあうれそあ
う

三ううせぬ庭

三御

くぬの法師五加部の法下王く手引うせん
一とこ十六まいよりうかうす一兩ううう死ふ
うけ合さんくゆくうううう手玉ハめふくお
またううり、このうれそうううの

新撰長祿寛正記

亨德三年四月徳平政長ヲ追出玉ケレハ政長ハ勝
元ノ館出テル、家人安富民部丞神保宗右衛門
佐佐新丘衛門ハ山名丘衛門佐之宿所忍居キリ
明レ長祿四年九月十九日辰ノ刻ニ義就打立給ヒケリサレヒ
義就コソ匪少邊便ラ存ト云凡何様雜說有テ討テ
向丁セアルヘシ因心有ヘシト御供ノ人ニノ中ニ
老者ハ小且足計若輩ハニタ胃ニテ打立ナリ先津
八譽田後津須屋甲斐庄以下ノ櫛黨也
岡部六同務七是ヲ無念ニ思ヒ馬場カ前ヲ馳ス

ノ先陣ハ大事ノモノソ見ナテエト高聲ニヨハリ

大勢ノ中ヘ切テ入テ切死シケリ

討死ノ人ニハ大將河内守國助弟左京亮譽田三河
守同原肥前守伯父遠江守孫孫三郎同產次郎龍見
部第孫左衛門甲斐庄民部丞同原新左衛門尉三野大和守
岡村父子土師孫左衛門尉菊並次郎左衛門酒匂三
郎旅魚仙波二郎長尾孫太郎若黨ニハ中村五郎
高柳野崎與五郎近佐カ家来ニハ岡部野太郎驚左
衛門次郎廣瀬高屋原父子中以下脱

同十五日政長河内ノ若江城ヘ入城有レ愈良ヨリ

成真院嶋中務丞御供申

寛正三年六月廿四日

弘川ノ陣中動ヨウシテアハテフタメキ出合ケレ
ハ先カケノ弘川裏打貞神保宗次郎丹下備後守長
倉大炊助掌貢新左衛門貴志信濃守ニ見三郎左衛
門佐竹努木山本薪左衛門尉服部七郎左衛門同掃
部元池因修理亮葉節寺ラ始トシテソツキヤウノ
無三十餘人討死サレトモ政長ノ卒陳迄ハ大モカ

ラス

同年伊豫ノ國住人河野通春上意ヲ持シカハ伊豫
人宇都宮井細川讚州家人等馳向テ合戰數度ニ及

ニシカハ中國ヨリ大内左京大夫穀弘モ上竟ヲ蒙

リ同河野ラ退治ノ為四國ニ發向シケル

四月去程ニ右衛門佐義乾ハ主地力館ニ籠リ甲斐庄和
田塙川以下ノ河内衆數多湖州一引退ヘヤヨシ議
スルト同ニカハ政長ヨリ管領ヘ此由ラ往進有シ
力ハ則大和衆越智禪正大將ト三ナ若江城ノ後詰
三発向不是モ猶無勢ナルヘシトテ重テ細川殿ヨ
リ大和勢ヲ催サル

群書類 徒九十七
永亨大嘗會記

次一獻如常次和舞内弁下殿被催之親禮内舎人着
小足可奏風俗也而如季常伶人仍局務口入之後全
引出如形表其因了次次獻次悠紀國司右守糸率歌
人常樂人也奏風俗舞内弁被舞健之 次三獻次御酒勅使弘配
親種付參議室親卿進之次天皇入御次王御渡西次
天皇御主基帳次内弁著先内弁範門前几子東面次内侍
内人内弁座東行降西華門前階徐行至左仗南頭
謝座昇西階著廟几子上官不著階下房之次小忌大
忌公卿列標下不召舍人不仰侍座西謝之後昇殿次供睛腋御

膳給臣下次一獻有獻物事如昨次奏田舞多治比氏

其射人數已下同

每次二獻

次長風俗

舞秀國席在此

次一獻

端造酒石

次國柄

奏進寔不奏也

如例節會不

矣

二獻伴佐臣五位各一人

主殿兩年預家賈職

率舞

人長尺未舞冠

退次安信氏有重有輕

率舞人列前庭

奏音志舞或着甲冑或着冠褐祿福者各執干戈文之

天王寺舞人舉人等也云之王信有欲

天王寺舞人舉人等也云之王信有欲

并職事并官等全下知彼舞人其射不便

三獻之

後參議隆夏卿出軒廊石御酒勅使交名予魚懷中之

指笏取玉獻之左仲明

右童德朝臣親衛朝臣

成麻朝臣

次大歌別當代

權中納言卿

宇豐

降東階經左伏前著前庭床

子蕉不儲

之臨廟

公卿列庭中舞舞面北上次神服女可奏解齋倭舞

而不及竹木次神祇官小忌侍從以下可奏解齋倭舞

星又其由許也

神服女倭舞事仰兩并神祇官和舞事

外記方催雖有相論康治被詔即沙事

御官令次大歌人立舞臺南頭次甲相公卿親臨東檻
令陳官人長大歌別當升東階復座次大歌人進
舞臺北發歌笛次舞姬生自玉前所奉進於南庇飛袖
賦事等指脇燭被扶指之可司敷筵直次先之天皇入御之尚亦參後房之如角火歌退生次
公卿列庭中舞舞面北上次神服女可奏解齋倭舞
而不及竹木次神祇官小忌侍從以下可奏解齋倭舞
星又其由許也

神服女倭舞事仰兩并神祇官和舞事

外記方催雖有相論康治被詔即沙事

所々合戦之事

勝元ハ一色引退ク上ハ兼テ内談セシ如ク公方ヲ
可致警固トテ翌日ニ遂出仕ヲ御旗等ヲ申下メ
四足ノ御門ニ御旗ヲサレ舉テ誠ニ用心キヒシ久人

ノ出入フ止ケル頃而一門他家ノ人々名集評定シ
テ弊賦ヲレ玉ヒケル先大手ノロノ北ヲ薬師寺ノ
與一兄弟攝州衆相討大和衆ヲ加勢ニ翌大田垣
力前ヘ被向大手ノ南ノ實相院シハ香川安富讚
州衆相副工長鹽奈良秋庭ノ人武田勢モ指向
舟橋ヨリ上可責ト也舟橋ヨリ下ハ細川下野守
丹波守護内藤備前守赤松伊豆守貞村ヲフムケ
ラレケル百々ノ透シハ三宅吹田茨木茨川等ノ諸
侍ニ仰セテ能成寺ノ南ヘ平賀カ所ヲ責ラル也安
居院大宮ラハ安富民部カ手勢六千余騎世保五

郎井京極六郎武衛義敏ノ衆ヲ十王堂ヲ下ニ花
開院鹽屋力宿所ヘ被向又中筋花ノ坊ノ透ヘハ
細川右馬入道太佐衆ヲ付寺ノ内ヨリ典厩ノ笠懸
ノ馬場ヲ經テ相國寺ノ延壽堂ヲ南ヘ打テ出テ花
坊ト集好院ヲ燒落セトナリ方々加援ニ押寄大手
藥師寺与一力責ロニ聞ノ声ヲ舉ナハ同時ニ攻入ト
牒シ合ケレ五月廿六日寅ノ刻ニ大手之口ヨリ大鼓ヲ
鳴闇ヲ喧ト上ケレハ諸方一同ニ切入ケル山名方ニ
モ垣屋越前守嫡子二郎左衛門同越中守子息孫
左衛門二男平右衛門同駿河守同平三田原持ノ

瀬山名一家六攝津守伊豆守左馬允金澤大坂
宮田等一萬五千人實相院正賓坊ヘ馳向フ沓西
安富武田ニ向テ戰ケリ自其南ノ大鼓堂前シハ
一色方ソ抱ヘケレ舟槁口ハ美作修理大夫同因
幡守護井佐々木高頼抱ケル大手ノ太田垣力方
（加勢トシ）彼一族同田公肥後入道宗理同美作
守同能登守三番衆等向ヒテ防戰ケレ凡去正月
軍勢皆國ヘ下リ小勢ニテ終ニ打負引退ケレハ寄
手ヨリ火箭シ射テ構ヲ燒拂フ間不叶而芝ノ藥
師ヘ引退ケレハ則備後ノ勢ヲ加勢ニ向ラル、花ノ

坊ヲハ義就ノ大和衆熊野衆ヲ以テ堅メラル 大宮口
八山名入道ノ嫡子伊豫守教豊ト其收成賴ニニ
番衆ノ佐々木一族是ヲ堅ヘサ六日ノ軍山名方シ
トロニ打負塩冶力宿所ヲモ燒拂ハ南ノ水落ノ
寺花ノ坊集好院花開院モ急灰燼ト成レカハ烟ノ
中炎ノ内モ不云敵味方入亂交兵カラ攻戰細川方
ニハ御靈合戰之恥ヲ雪シト牙シ咀テ攻戰退出セハ攻
入々々ハ退出ス又盧山寺ノ南一条大宮ハ細川
備中守力館也武衛義廉ヲ大將トシテ甲斐朝倉
織田鹿野等兵一萬余騎ニテ押寄タリ城中ニモ

兼テ思儲タル事ナレハ細川讚岐守同名淡路和泉
ノ兩守護爰ラ先途ト防戰寄手ノ方ニハ山名相模
守力同名布施左衛門佐ヲ加勢トシテ荒手ラノ替
責ニケル城中モ戰疲テ荒手替レト招キケレハ一条大
宮ノ攻口及難儀ノ由聞ケレハ京極大膳大夫持清一
萬余騎鬨聲ラ喧ト作り荒手トシテ還橋ヲ西ヘ
打テ行是ヲ見テ讚岐守淡路守和泉力衆ハ引退
テ雲ノ寺細川淡路守力館ニ憩テ暫物ノ具脱テ
梅酸ノ渴フ休シトシケル所ニ京極衆猛勢ニテ未
鹿々ト手當ラ不定所ヲ武衛ノ内朝食彈正左衛

門馬ヨリ飛テ下リ自カラ敵五六人切伏ケレハ甲斐織田瓜生鹿野等モ歎セ七人討取テ退立ケレ京極勢一冬リモタニラス引退讚岐守カ館ヘ引テ行返セト云ヘ凡曾テ耳ニモ聞イレス子ハ親ヲ捨郎達ハ主ヲ不知レテ還橋ノ狭ク危ヲモ不云北重ニテル人馬トモコ橋ノ上ヨリセキ落音山ノ崩ルヤウニ聞エケレハ是ニ驚キ雲ノ寺ニ休ミ居タル兵共ヲハ何事ソキタナレ返セト云ヘ凡前ノ難所ヲ不顧逃亡ニテ引ホトニ岸ヨリナタレ落橋ヨリセキ落川ハ半地ト埋シテリ山名金吾ハ太田垣カ貞軍ニ勝氣シナル力朝

倉力勦ヲ右衛門佐義就見テ無比類高名也馬ヨリ飛下リ打物取テ戦ニ事見事成ト被申レハ山名入道大ニ感悅シ着替真足ト馬大カラ被出ケリ

一条大宮猪熊合戦之事

一条大宮細川備中守夜晝四日ノ合戦過半討レ二千余人残リケルカ四方ヨリ攻入敵ヲ切出シ屋形ノ中へ引籠此強卒共骨ヲ粉ニ碎ク凡ヒルムニレト見エケルラ赤松次郎入道政則纔三百余人ノ勢ニテ掛向ヒ細川備中守ヲ無碍ニ責殺サで見ハ耻辱ニテラスヤイサヤ備中守ト打死レテ贏ラ訪シト正親

町へ折下猪熊ヲ上へ馳向へ赤松ト云剛ノ者カテ
戮スルフ進メヤ城中ノ兵ト大音聲ヲ揚テ攻上リ
ケレハ一条ノ大宮猪ノ熊ハ未四方凡人家ノ軒端重
リ小路軍、事ナシハ武衛方甲斐朝倉氏生力軍
兵戦ツカレ荒手ニクリ立ラレテ廬山寺ノ西迄
引退ケレハ爰ニハ山名相摸守ヒカヘタリケル刀荒手
成リ入替リテ戦ヒケレハ赤松方浦上小寺依藤安
テ詮ト戦ヒケリ中ニモ依藤豊後守ヲ手ノ脇ヲ射レ
其矢ヲ折カケテ相摸守一門山名常陸守ト引組
テ取テ押ヘ頸カキ切太刀ヲ實名棄ケルハ古ノ權五

郎景政ニモ不勞高名哉ト主兵衆相摸守ノ内片山
備前守内ア大力有赤松方明石越前守是又力量
者也互ニ引擣テ上主成業ニ成ケルカ明石組勝テ灰
山カ頸ヲ取テ主舉處ニ山名孫四郎ト云片山カ傍
輩押並組ケルヲ明石引寄是ヲモ打テケリ惣テ
此合戦ニ相摸守一族若黨廿人被討ケレハ相摸守
不叶テ引退其途ニ備中守ヲ引取テ館ニ火ソカ
ケテ讀政守力館ハス入ニケル

續平定卷之二

近征越前軍之事

文明三年正月廿三日近海南郡惣大將六角高
賴峰^{モロコシ}ニレ^{シテ}攻上ヲキナ折^{ハシ}ヒテハ北郡京極方

馳向ヒケリ加勢トノ細川讚州同和泉守護河内衆
遊佐大和十市馳向テ合戦レケレハ六角方利無ア
メ山内之郎以下輩多以被討ケレハ高賴以下甲賀山
ヘ引籠ル高賴老臣佐々木新左衛門尉入道勝綱
ハ威徳院ニ有ケルヲ敵押寄ルト聞テ羨濃部和田
馳走テ一先ツ落玉ヘト進メケレトモ我已ニ衰老メ
餘命不久爰ニテ自害シ高賴ヲ可落ト腹十文字
ニ切テ失^ハリ

尾州同心シ武畧状ラソトハシケル安藝國ニハ小早
川又四郎隆景毛利左馬頭同備中守石見國ニハ益田
福ヤ三隅海上ハ村上一黨免前國ニハ麻生孫玉郎牢
人シテ豊後ニ居タリシラハ郎殿ノ案内者ノ使ニ遣ス
事ナハヨロコヒスミ出テソ調シケル山口ニハ杉一黨同心謀叛
ノ人數ト聞ケル内藤ニハ少心ラ、力レケル

群書類從三百九十四合巻部

大内義隆記

義隆が一代ニ安藝國武田カ、城金山嚴島神主カ城櫻
尾備後國ニハ山名宮内少輔理興城神鳥モ切取テ備中
備前ニ至ル、テヒカヌ武土ハナカリケリ
大永七年八月ニ尼子伊與守安藝國西条郡鏡山ヲ切
取テ引足ニ備後國知知又九郎豊里カ城押取寄テ后
子之一族立千餘騎國ノ者ニ和知一族豊後守少輔五
郎三吉ノ一族宮下野守ラ手ニ付テ大將陳ニハ尾頭ヲ取
魚鱗陣ヲ東ニアテ鶴翼ノ陣ヲ西ニミテ南方ラアケルラ養
父道麒入道後詰、其為ニ山内大和守豊道同直道同鷹
野山毛利え就ニカラハレ諸勢ヲ引卒ニ向九月十六日ニ

蔚陣スハ雲州ノ軍兵^{凡退}卒ニテ属ニ和興ノ調法アリケル又
カモ同心仕リ夜ヌケニソ引ニケリ

中國治亂記

其頃相良遠江守藤原武任ト尾張守多良晴賢而生
頭也

又石見ノ石見正頼ハ此合義ニ義長ニ打負テ和談ニナリ
大藏太輔ト前^{三在り}
降參シテ息男龜王丸ヲ人質ニ出シケルテ山口ノ福井ト申處ニ
置後元服ニテ吉見ニ郎廣頼ト号ス

防州方六丈内左京大夫義長ハ吉見ヲサヘニ渡川ニ在
陣内藤隆世ハ右田力嶽陶中務權太輔隆房ハ畠田ノ若
山岳陣ノ久河郡蓮花寺六形モリ倉掛ニハ形治部太天

隆春在陣也杉ト杉杜ハ元就ヘ降參シテ人質ラ遣ニテ
几カ杉ハ亦畠田ヘ内通シケルテ杉杜差川三内通ノ狀ラヘイ
取リ元就ニミセケレハ元就大キニ悅ニ倉掛ノ城ヘ押寄攻落松治
部太夫平隆春シ初メテハ百餘人ラ討取リ岩國ヘ皈陣リケル
十河物語

叔長宗我部ハ阿州ヲ討從讃州ヲモ三分二手ニ入ヒカ
トモ十河虎丸両城ハ堅固ニテ落ス十河ハ隼人佐政泰
虎丸ハ安富玄蕃尤持タリ天正十一年ニ讃岐ラ仙石
權兵衛并領セラレ仙石則淡州ヨリ船ニトリノリ讃岐ノ
引田ニ着船シ掛上ケ城ヲシラヘ入タリ元親ハ十河
虎丸両城ヲ攻仙石早リ切タル大將ナレハ勢ヲタリ

出シ元親ト一戦ミテ敗軍ス仙石ヲ侍仙石勘解由仙
石權平討死ス仙石覺石衛門ト元親ヲ侍入將中嶋與
市兵衛ト鎗ヲ令セ興市兵衛カ首ヲハ戸田助六ニトレ
トテ覺石衛門トラセタリ加藤肥後守清正ニ居タル
森本儀大夫少林隼人兩人其時仙石カ方ニ有シ力大
成勧シ高名ス元親カ侍ニ箱吉新藏人福富平兵衛尉
アト鎗ヲ合セタリ其外双方ニ有レニ爰ニ畠之仙石一
義ニ貞船ニノリ讚州ヘカヘル十河虎丸両城ハ兵糧ツ
キ其上後卷敗軍アレハ無力城ヲ元親ニワクシナ河モ安
富ニ上洛ス天正十三年ノ春秀吉公根來ヲ御退治ア
リ紀州太田ヲ水攻ニメサレ南方平均ニ属シ同年、夏四

國御退治御名代ニ御舎弟大和大納言秀長卿ヲ被遣
其時ハイタタ美濃守タリ三好孫七郎秀次備前ノ宇
喜多八郎秀家小寺藤兵衛尉赤松次郎則房ナト阿州
ヘ付城々ラ責ム興州ヘハ毛利右馬頭輝元吉川小早
川ラ先トニテ金子ノ城ラセメ城主降参セス脇功夕
リ堵長我部降參イタシ土佐一國安堵ス讚州ヲハ仙
石權兵衛尉ニタマハリ丁河隼人佐政泰モ安富亥蕃
丸モ本領ニテ仙石カ旗下ニ成タリ爰ニ豊後ノ屋形
大友休庵子息左兵衛督義経父子ナカラ吉利支丹ノ
宗門ニ成寺ヲ立豊後一國ノ神社佛閣ヲ焼亡シ古昔
ノ伽藍ヲ破却シ神前拂前ニテ牛馬ヲ刺殺ニ喰ヒナ

トシ惡逆無道古今ニ獨步セリ代ニ薩摩ノ屋形島津
家ハ義ラ專ニ私欲ノ軍ヲ起サス上下皆古風ナル
ニヘ數代彼家安隱ナリ此時大友ノ暴惡ラ靜ムトテ
大軍ヲ率シ薩摩勢豊後ヘ發向ス豊後ノ城ニ廻ニケ
ニシアルヒハ明渡シ捨外風ニ木ノ葉ノ散コトニ大
久居城ハ印杵ナリ名城タリ又志賀小左衛門ナ居タレ
南部岡ノ城ハ大平記ニモ見ヘタリ其隱ナキ名城ニテ
攻ニカナハス又城中ヨリ出テ衝フモナラス薩摩勢
コシラハ打ステアトニナシ七八里府内ロヘ出張ニ戸次
ノ年光ト云城ラセム一說ニハ清田ノ城トモ云大友
ハ近年身ノ置町ナサニ早ニ秀吉公ノ幕下ニ参テし

ハ此節急ラ告ル事櫛ノ歯ヲヒクカコトク則土佐ノ
長宇我郡宮内少輔泰元親子息孫三郎信親讚岐ノ仙
石權兵衛尉十河隼人佐政泰安富玄蕃允光豊後ヘ下
リ府内ノ上之原ニ城ラマニラヘ楠籠薩摩勢ト合戦
ライムヘカラスアイシライ秉年三月秀吉公九州御
勤座テ可相待ト御朱印ヲナサレ各府内ニ着陣ス
大友ハ加勢ノ官軍ヲ今三日待コタヘスニテ豊前ノ
龍王ノ城ヘ出入上之原ニハ各城ヲマニラヘムト因
意不然ル所ニ仙石是非年光ノ後卷ニ薩摩ト一軍イ
々ニ追拂ムト云彼是無用ト制シケレバ仙石無理ニ
進ニ依テ武三郎信親甲ハ元親ノ仰御老駄ニハ御尤

ニ侯併仙石同心ナリ侯一軍ナサし候へ討死イタシ
候而ハ上意モ何モ入不申ト云十河モ安富モ信親ノ
仰尤ト云則旗ノ手ヲ、口ニテ次川打越行薩摩勢ハ侍
請官軍ノ人數ヲ立レハラクアイシラヒ一文字ニ飛
カリ仙石ノ聲ノ田宮先陣シリニカ撞立ラシ敗軍ニ
田宮モ討死ス備祿三郎信親十河隼人佐政泰安富玄
蕃モノキ侍ラハ退ヘキヲ馬ヨリラリ立薩摩勢ト無
數ニ戰ヒ一足モ引ス討死ス元親カ侍細河源左衛門
福島隼人佐兩人ハ元親ニ暇ヲ乞テ取テ返シ信親討
死ノ所^ノ相戰ヒ討死ス元親モ討死セントアリニラ
侍トモ馬ノロニ取付漸ニ上ノ原ノ城下テ退タリ

上月記

南方御退治條

一綸盲翁詩内書等

當方唐頂戴也間中村彈正忠貞友故仰付處於
西宮院退治之事者既可弃一命上者爭不達本意
于雖然至神靈本現者眾入于吉野山人數二度ム
シ帰洛シ條神龜本量記シ事不申領掌之奉返御内
書等然其以後之條厥御内書石見太郎左衛門
尉就惣別申合被御本所様具依申巨細灰三福寺
相共被仰誅重而被成下傳内書漢文言シ事致忠

前者富樺次郎成春照加賀國_{石河立郡}兵備前國
新田庄右雲國宇賀庄伊勢國高官係等為唐恩賞
可放下之由蒙仰贊地候之間彼御刺以下據兵庫
助依藤祐三郎為使入眼之後可賜之由申定三福
古豫置申之去康政二年丙子十二月廿日為入吉
野山巖向于大和國宇智郡人數君到次第_ノ因

間嶋彦太郎

土月左近將監

滿吉

中村彈正忠貞

義久

坂元序助

丹生屋常刀左衛門尉

浦上左京亮

小川兵庫助

石地兵庫助

河高治部少輔

河内立郎

小川七郎

村弓徳三郎

重舟次郎左衛門尉

中村次郎

中村五郎

河弓又三郎

木梨三郎

河原弥太郎

丹生屋四郎左衛門尉

奥住彦四郎

馬住主計助

石地四郎

中村安藤坊

多良千代松九代
上野小次郎

平賀彦左衛門尉

百鳥波官

中村強三忠政官

小谷與次

為木糸松多賀掌故官遣

小山与藤兵衛入道

方京都輕掌故官遣

伊藤祐二郎

京都輕掌故官遣

石修理亮

此處造意趣中村宗通兵庫助佑返忠一向不被

入主之間暫經日敷小谷與次號忠河彌以隱忍之姿

更箇度參予涼息所說種々陳申丙官儀奈乞漸和

移必大勢者清障心之嘗殘討手入山中畢

一次季長祿元丁丑十二月二日夜半子刻丹生屋常

刀左衛門尉圓四郎左衛門尉於吉野奥小山奉討

南方一宮同伺候人升口三郎左衛門致汝汰唐頬
弄神鬼賜也此時雖抽忠功於伯母谷与申在所而
兄弟相共討死仕條波取逐神鬼訖佐之大功之証
據背不允以之當小寺羸兵湊入道迴之思議之了
簡重而取逐神鬼巨細見于後

一同夜半子於考野山防壁口奉討南方二宮同伺候
人宇野大和守高野山智永嚴院弟子定順同次郎
三郎名字不知此四人討捕訖大勢旨以波入子細見于
前討手署到以弟山因

於角弓号赤松左衛門應

間鳥彦太郎引二宮御衣

鳥居千代松丸代
中村次郎

上野小次郎

上日左近松監東討二宮
中村彈正忠奉西討二宮序頬

平瀬彦左衛門尉

平瀬小太郎

小谷與次

以只八人

乃弓木範孝波
小守藤兵衛入道

辛卯新春
總合序助

京部雜考

明石修理亮

本姓播州源氏仕於
佐藤秀三郎

前日以梶原法德史_{即之}中村彈正忠貞友伊藤
雨人自業_之書狀有_之

每官侍頭_是神龜同時雖奉取或被討或埋深雪遠
殘者達山野是_於急度_ニ及_シ追進_シ至小_ニ處多傍
入送大和越智申合調有_様註_シ在小河中勞少輔
名同_前之

一神龜亦現_シ計畠小_ニ處兵馬入道性訖罷下和州
小河中勞少輔相共廻_シ調署_シ奉取迄_シ終_シ

年長祿二年八月晦日奉成神龜入_シ東條_ニ忠
吉依參比類_也御約諾加賀半國_并備前國新田府
伊勢國高宮保等應_シ敗_云云

一一官者吉野與小山徒_二官者同河野鄉中阻大
山雖有通路七_ハ里_シ入山人數_五申_{通_シ}此_ノ相達
佐卒竟者也

一加賀國數箇_合事_度示備前國新田莊等_合戰事而_シ重而
可被_シ往_シ申_ル

右此條_ノ時_ハ宜有樣大概_シ此_ノ以入山人數_シ中
于今相殘上月左近_ノ監存生仕_ハ為末代_シ謹據山

中公私存於前旁申達記置之者也仍大概也傳

武被

肥前國造寺隆信佐々木末孫也

有題文明十年戊戌八月日屬宇雲守

一徵賀

秀世判

近江守

上月左近乃監

滿吉判

秀

通義直經智也也也也也也也也也也也也

也也也也也也也也也也也也也也也也也也

群書類從卷三百九十七 合戰部廿九

大友記

御旗下四家之大名

田原親定 其子親貫

戸次伯耆守鑑連入道立花道雪二敗戸次左衛門尉重

秀末也也也也也也也也也也也也也也也也也

佐伯權守惟定

曰田

大友旗下之大名但一身ヲ

先驗之

肥前國造寺隆信佐々木末孫也

同國

疏紫左馬頭惟定其子上野介廣門但少威

筑前國 秋月文種其子種實

漢高祖後苗裔實
公ヨリ二十八代

同國

原田左京大夫

右一領筋也姓猶

此外有小名

筑後國

浦池志摩守鑑廣

其子丘庫頭鎮運

宇津言
孙三郎

木孫同

同國

浦池近江守鑑盛入道宗雪

其子鎮連

姓

肥後國

城親冬

合志輝正

赤星宮内

宇土

隈部鎮氏

賀井宗運

此外有小名

豊前國

城井

長野

此外有小名

荒木略記

捺津國荒木一家之事

荒木大庭大輔

丹波竹波多野一門而之此庭、捺津、忍人、佐多

武庫郡山都庄口下御小守竹舟五之居中南太

荒木弓彌陽大庭少浦嫡子

久三房

子久萬年子平相模守故太守也

荒木美作守大庭少浦二男

荒木志摩守

法名安吉子

荒木信濃守大庭少浦三男

荒木捺津守

信濃守子

母八中川佐渡守

姓佐渡八中川瀬三湯親王之女也

天文弘治元以捺津守之城主池田民部大浦

勝政伊丹之城子伊丹多庫頭有馬郡三田之城有馬

宇羽守

是八百馬を蓄ひ一家を八名にして八百馬を蓄ひ八生國
播磨高石松子ノ内度人有るを名多て十兵を攝广侍ら御相能物君

能勢十郎

能勢十郎伯父彦彦多角川内度人有るを名多て十兵を攝广侍ら御相能物君

能勢十郎

伯父彦彦多角川内度人有るを名多て十兵を攝广侍ら御相能物君

是瀬多湯守一覺よりほどの事に何とも他因とも
郡山の西馬場とて陳とて居ヤセ和田高櫻元聞
他因之者を大將もしくて象かと一戦で仕と是ニ端端
芥子くらとて居キ、老を高君させりんと續ヒと云
率尔とす三郎知ふ公方とて高達使永井隼人正麿
之安喜山城
三月度近書院考、參合和田五郎とてハ他因之者
と云、大將とくらひとても自威仕と存智勇と一戦及
勝りて威光王て迫多と威とて多く存アヤシ原ノリ
と残け死と存死狂仕と率尔とほと母の所候等
此頃より史記と同書より敗軍と仕ひと云アシ原
也

和田ノは隼人處之例之とも吳具立修ヒテアシ原
渺々と不及び刀眼もあり大將とて御使と云ふがア大死
仕仕立計ヤシ俄々医康元と自ら氣合とて番具吳
傍ら多き後兵士と和田八高掛ヒテ二三里とくぬ塙ヒ
中而止陳と云四百人合戰仕池田方討勝和田と瀬多湯
討之と以て余外馬主率和、鉢とまゆ公侍或百條和田方
小内原と相共ひ五人も有すと云申侍ハ率人十手
柄手と討死仕後高櫻、瀬多城竹一り伊丹多原源
次第ノは威光アラカリ行ヒテ庫頭侍丹と相共ヒ

宰人を改め鳴川信者いと庶に妹聲ふくらひ討罪
小池田（隨心うやすやひ府伊丹と不通ひ）其後
多羅之城を在城下に持津ち小多時より信長の氣を入
持津也相隨ひ守護職を乞ひて御判を取ルテ居
アリ根川や荒木一家を置くと相隨リ一信長園
城ももと作リ伊丹と在園と名と改称津也居城
作方高根子高山左道荒木五中川瀬等鳴鳥原の花事
七城五荒木志摩の能勢の能勢十郎久保の八幡
伯耆毛佐左佐有馬郡三國の荒木平至大和因幡阿波
仁倉尾張端之城を持津ち嫡の前立而主石金也
記の具小法度向書などあり

